

50<sup>th</sup>  
ANNIVERSARY

# 三百里揆文教

但馬文教府創立50周年記念誌







(昭和50年代の但馬文教府と豊岡の町並み)

# 〈目次〉

## ■あいさつ

創立50周年記念に寄せて 但馬文教府長 川上 教朗	3
但馬文教府に期待する 兵庫県知事 井戸 敏三	4
「但馬の夢づくり・人づくりの府」として 但馬自治会長(新温泉町長) 岡本 英樹	5
但馬文教府創立50周年を祝して 但馬中学校長会長(養父市立八鹿青溪中学校長) 池田 哲彦	6

## ■但馬文教府の思い出

但馬文教府創設秘話 林 五和夫	8
思い出深い文教府 黒田 政良	10
みてやまと共に学ぶ 河本 匡弘	10
今、新たな出会い 原田 元紀	11
但馬文教府と私の回想 淡島 美千代	11
演劇を通して地元短期大学での異世代間交流 百合岡 孝夫	12
但馬文庫が新設された 園谷 優	12
本土在住50周年記念 屋良 景千代	13
宿泊研修と文教府 小山 六良兵衛	13
但馬文教府の思い出 田中 保	14
但馬文教府創立50周年に想う 平位 紘一	14
但馬文教府の思い出 吉岡 賢次	15
但馬文教府と私 金子 達也	15
昔の但馬文教府を思い出す 中井 和代	16
但馬文教府の50年 森田 泰男	16
但馬に生まれて 足立 彰	17
森はな記念賞をいただいて 松本 寛生	17
海と僕 宇野 拓実	18
アリジゴクの不思議発見その2 ～果作り名人のまき～ 木山 実咲	18

## ■但馬文教府への期待 ～但馬に寄せる思い～

但馬文教府よ永遠なれ 第18代 但馬文教府長 柵田 一文	20
但馬文教府の歴史に但馬の光を見る 第19代 但馬文教府長 松田 義人	21
但馬文教府創立50周年に思う 第20代 但馬文教府長 石井 稔	22
但馬文教府への期待 ～「村を育てる学力」の精神を～ 第21代 但馬文教府長 加古 博志	23
但馬文教府への期待 但馬ふるさと芸術文化振興事業実行委員長 籾谷 力夫	24
但馬文教府と連携協定締結による学生の育成 近畿大学豊岡短期大学長 長谷川 定宣	24
明日の但馬を担う 神戸新聞但馬総局長 岡田 剛	25
ふるさと但馬を! 但馬小学校長会長(朝来市立梁瀬小学校長) 村尾 輝之	25

## ■但馬文教府のあゆみ [昭和38年度～平成25年度]

○昭和38年度～平成25年度	28
○主要事業一覧	50
○但馬文教府職員名簿(昭和38年度から平成25年度まで)	54
○文教府夏期大学の軌跡	58

## ■但馬文教府のいま

○但馬文教府の施設	64
○4年制大学講座「但馬文教府みてやま学園」	66
○地域活動実践講座「但馬文教府みてやま学園大学院」	67
○但馬生活創造情報プラザ	68
○但馬文教府の各種事業	69
○但馬文教府創立50周年記念事業	70

## ■あとがき

但馬文教府創立50周年記念事業実行委員長 藤原 俊輔	72
-------------------------------	----

# 創立50周年記念に寄せて



但馬文教府長

川上 教 朗

古いながらも、保存状態のいい赤字1色印刷の新聞折り込み広告を持参してくださった方がありました。それには、開設記念式典を翌日に控えた昭和38年11月30日、市民体育館では記念講演と豊岡市連合婦人会・青年団有志の出演による舞踊の会が開催されること、メインストリートでは豊岡北中学校ブラスバンド部の行進と豊岡・八条両小学校生の旗行列が練り歩き、同時刻に文教府で風船を一齐に放つこと、商店街は12月5日まで協賛大売出しを行うことが宣伝されています。ちなみに、講演講師は阪本勝元知事であり、「但馬文教府の将来について」という演題が記されています。たった1枚の、今から見ればいかにも安物の折り込み広告に込められた当時の但馬人の熱い思いが、今に伝わってくるように感じられます。

昭和38年は豪雪に明けた年であり、降り続く白魔との闘いの中で、当地も沿岸部を中心に人的物的に大きな被害を被った年でありました。その鬱々とした重い空気を払拭し、但馬の黎明を告げ、自信と誇りと希望を与えるにふさわしい殿堂の完成、それが但馬文教府であり、「但馬の総合的な開発は、豊かな人づくりにある」という開設理念をもとに、但馬の芸術・文化・教育の振興を図るその拠点施設として、現在地に開設されました。

爾来50年、関係各機関の指導のよろしきを得、また、進取の気概に富んだ歴代文教府長並びに職員の活躍、そして何よりも、但馬の人々の「郷土を愛する心と、自らの地域は自らの手で切り拓こう」とする情熱に支えられながら、関係各機関との緊密な連携を図りつつ、「生涯学習の総合的推進」、「高齢者の生きがいづくりの推進及び支援」、「地域文化活動の振興」の拠点施設として、また、但馬生活創造情報プラザの活動拠点として、着実にその使命を果たしつつ、今に至っているものと自負しております。

但馬文教府は、この創立50周年を機に、積み重ねてまいりましたこれら各種事業をさらに充実発展させ、当地域における生涯学習のセンター的機能をより積極的に果たし、生涯学習を通して地域づくりにますます寄与し、愛着と誇りの持てるふるさと但馬の創生に全力を傾注してまいります。関係の皆さまには、今後ともより一層のご支援ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

なお、末筆ではございますが、多くの皆さまのご理解とご協力により、この記念誌が発刊できますこと、心からお礼申し上げます。

# 但馬文教府に期待する



兵庫県知事

井戸敏三

兵庫県立但馬文教府が創立して50周年を迎えました。

中国の古典「書経」にある「三百里文教を揆る」をその名の由来とし、「純朴で人情に厚い但馬の地であるからこそ、文化、教育の振興を図らなければならない」との考えから、昭和38年に誕生した但馬文教府。以来、50年の長きにわたり、但馬地域の芸術・文化・教育振興の拠点として、地域の皆様とともに歩んできました。生活創造グループの支援、高齢者の生きがいづくり、青少年育成事業、但馬に関する図書を収集した但馬文庫の開設など、但馬地域の人づくりや生活文化の向上に寄与しています。兵庫県生きがい創造協会をはじめ、関係の皆様のご支援ご協力に改めて感謝します。

兵庫県も人口減少社会を迎えました。あわせて少子高齢化が進んでいます。このような中でも、摂津、播磨、但馬、丹波、淡路の5つの国からなる兵庫の多様性を生かし、将来の課題や危機に対して、事前に解決の道筋を定め、真正面から臆することなく対応していかねばなりません。

ここ但馬では、「但馬・理想の都の祭典」から20年となる平成26年度を、但馬が抱える課題の解決と新たな夢を実現する契機として、「～出会い・感動～夢但馬2014」を展開します。山陰海岸ジオパークをはじめ、ラムサール条約に湿地登録された円山川下流域・周辺水田、野生復帰を果たしたコウノトリなどの豊かな地域資源を生かし、地域が一体となって但馬地域の創生をめざします。

それだけに、学びと実践の拠点である但馬文教府には、これまでの経験やネットワークを生かし、但馬の魅力の発掘やさらなる但馬地域の発展充実に向け、大きな役割を担っていたかなくてはなりません。

但馬文教府の新たな半世紀が幕を開けます。厳しい自然の中で他者への思いやりや信頼の心を育んできた“但馬人”の皆様とともに、「あしたのふるさと但馬」づくりの先導役になっていただくことを期待しています。

## 「但馬の夢づくり・人づくりの府」として



但馬自治会長(新温泉町長)  
岡本英樹

但馬文教府創立50周年記念誌の発刊、誠におめでとうございます。

東京オリンピックの前年である1963年、但馬地域に文化や芸術、教育を発信する県内初の複合施設として誕生した但馬文教府。1968年には、作家の故・司馬遼太郎氏ら全国的に著名な講師を迎える文教府夏期大学もスタートしました。私も学生時代には、夢を追い向学心にあふれていましたので、夏休みに帰省した際、浜坂から豊岡まで列車で1時間半かけて文教府夏期大学の聴講に出かけた記憶があります。毎年8月になると、豊岡の街中に著名な講師を紹介した文教府夏期大学の看板が出ることは、夏の風物詩のようになりました。また、芸術文化、環境、福祉など豊かな人生を送るための生涯学習、地域づくり活動やボランティア活動などの拠点になりました。

さて、今年12月に但馬文教府は、設立半世紀の節目を迎えますが、この50年の間に社会は大きく変化しました。

ひとつは、人口減少・少子高齢化の急速な進行です。1963年の但馬の人口は245,000人だったものが、現在では181,000人に減少しました。

二つ目は、市町合併により、但馬の市町が1市18町から3市2町になったこと。

三つ目は、道路等交通アクセスの進展により、但馬の各市町から但馬文教府までが近くなったこと。浜坂から豊岡まで列車で1時間半かかっていたものが、今、クルマなら50分で行けます。

四つ目は、モノの豊かさを求めてきた“成長社会”とは異なった、人間や自然を大切に、こころの豊かさを求める“成熟社会”へ転換したことです。

このような中で、これまでの歴史ある取り組みを継承するとともに、新たなニーズや課題に対応した取り組みも求められるところです。

但馬文教府が51年目の新たな歩みを始める2014年度は、「夢但馬2014」が開催されます。半世紀の歩みをこの記念誌でふり振り返りながら、“但馬の夢づくり・人づくりの府”として、かつて元兵庫県知事阪本勝氏が言われた“純朴敦厚の伝統的美風の残る”という但馬の文化、教育の振興に思いを巡らし、また、記念誌の編纂にご尽力いただいた皆様に深く謝意を表して、記念誌発刊のお祝いの挨拶と致します。

# 但馬文教府 創立50周年を祝して



但馬中学校長会長  
(養父市立八鹿青溪中学校長)

池田 哲彦

但馬文教府の創立50周年まことにおめでとうございます。

「文教府」は但馬の教育・文化の拠点として多くの成果を上げてこられました。文教府といえば夏期大学が思い出されます。日本の優れた学者、作家、文化人などのすばらしい講演を聴くまたとない機会を与えていただきました。毎年、夏期大学にどのような講師が来られるのか楽しみにしていました。

今日ではコウノトリ但馬空港があり、また、北近畿豊岡自動車道が八鹿氷ノ山までのび、大阪、神戸との距離もぐんと近づいてまいりました。しかし、長年にわたり文教府は常に但馬に住む人々に文化の香りを届け、生涯にわたって学び続ける場所として貴重な存在でありました。

但馬の中学校も少子化の影響を受け、文教府が開設された昭和38年には51校あった中学校が現在では24校に減ってしまいました。

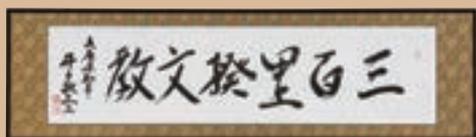
その間に中学生の意識も随分変化してきました。例えば、部活動では但馬を代表して出場しても、1回戦か2回戦で負けても当たり前のように思っていました。中には県大会優勝、近畿大会優勝ということも稀にはありましたが、それは数年に1度のことでありました。しかし、最近では但馬の中学校が兵庫県大会で優勝したり、弁論大会や吹奏楽コンクールで最優秀をとることもめずらしいことではなくなりました。但馬は決して遅れているところではなく、自然環境に恵まれ、人材の豊富などであり、但馬を誇りに思う気持ちが高まってきたからだと思います。

昭和42年から但馬小中学生作文・詩集「但馬の子ども」が発刊され続けたり、45回もの「科学する但馬の子ども作品展」が行われてきたりしました。これらの文教府の取り組みが但馬の子どもたちに大きな自信と誇りを与え、「ふるさと但馬」を大切にする心が育まれてきたのではないかと確信いたします。

今までの輝かしい取り組みが、さらに発展していくことを祈念いたします。



# 但馬文教府の 思 い 出



# 但馬文教府創設秘話



林 五和夫  
(第5代但馬文教府長)

兵庫県立但馬文教府は昭和38年12月1日に創設開館した。以来半世紀、その間設立の趣旨に基いた運営実績と、但馬の方々と共に日々成長充実してきた歴史は長く重い。

歴代府長は、現在の川上府長で22代を数え、私は5代目、今や府長経験者の中では最年長(83才)となった。

このたびの創立50周年の記念事業の1つとして、記念誌の発行があり、歴代府長の寄稿が求められた。各府長それぞれにエピソードがあり、多彩な紙面になると思う。本稿は、知る人の少ないであろう文教府創設秘話に絞らせていただく。

昭和20年8月、日本国は史上初の敗戦という国難に直面した。国の行政・政治、産業・経済、教育・文化をはじめ、国全体が荒廃、混迷し、国民生活は困窮を極めた。以来、国を挙げて復旧、復興へ懸命に努めたが、敗戦の傷跡は深く、後に奇跡の復興と言われるまでには苦難の道が続いた。

このような昭和29年末に、文人、学者であり、衆議院議員や尼崎市長などを歴任された、異色とも言われた阪本 勝氏が兵庫県知事に就任され、2期8年間在任された。

着任後、財政難の中、独創的な発想と、力強い行動力で、県民の幸せ、県土の発展を目指して諸施策を展開された。中でも、但馬の自然と住民に寄せられた人間味溢れる愛情は格別であったと言われる。この時代の県行政の主体は、戦災からの社会基盤の復興、生活の安定、衰退した諸産業の再生などに手一杯であり、文化行政などは無縁だったと言える。

このような時代に、阪本知事は、但馬海岸道路(自衛隊道路)の新設、無灯火地区の解消、ハチ高原の開発、こうのとりの保護育成、但馬の将来を担う人づくりのための学習と心の絆づくりの場として、全国に類例の無い県立の但馬文教府の創設など愛の県政を推進された。

昭和31年、兵庫県下で3番目に古い歴史を持つ明治29年創立の県立豊岡高校(旧制豊岡中学校)が創立60周年を迎えた。

その記念誌の編集を担当された梅谷光信教諭(後の弁護士・故人)が、巻末に、明治34年卒業の旧制豊岡中学1回生の生徒総代答辞と、昭和24年卒業の新制豊岡高校1回生(旧豊岡中学48回)の長編の答辞詩(150行)の全文を掲載し、巻頭に阪本知事の祝辞をいただいた。このことが縁となり、長編の答辞詩を読まれた知事は、激しく心を打たれ感動された。知事は、早速、教育文化関係者らと協議のうえ、但馬の将来発展のために今一番必要なものは、但馬人が、但馬に誇りを持ち、自主、自律心の強い「人づくり」であることに着目、教育文化行政施策の筆頭事業として創設されたのが但馬文教府であった。

今、改めて知事を動かさせた長編答辞詩の終章の15行を60数年ぶりに紙上に紹介させていただく。

由来、この地の先人  
 立身出世の風にかられて  
 故郷をかへりみず。  
 よしや 錦を飾りて帰りきたるも  
 この低き文化を盛るにつとめず。  
 この地、春来らんとするも  
 来る能わず。  
 蝶舞わんとするも  
 求むるに花なし。  
 ああ但馬の地や、いと悲し。  
 一粒の種子をまきて愛で育つるは  
 げにわれらにして  
 またわれらをおきて他になし。  
 われらこの地に  
 春を招かん。  
 われらこの地に  
 文化の花を咲かせん。

終戦僅か3年余り、先行き不透明な混沌の時代に、当時17、18才の卒業生たちが、但馬の将来を憂い、発展を願って「但馬に文化の花を咲かせん」と卒業に当って力強く宣言したその心意気は誠に壮であり、快挙と言える。

阪本知事が但馬人を表現された「但馬人に潜在する稜々の気骨、烈々の気魄を内に秘めつつ、惻々たる愛情を外に現わす風格」に通じるものがある。

この若者たちの心情を汲み、施策として対応された阪本知事のご識見と人間愛の深さに心から感謝と敬意を表させていただく。

50周年に当たり、但馬文教育創設、運営に関わられた方々、文教育を愛し育ててくださった但馬の皆様、本当に有難うございました。今後の但馬と、但馬文教育（阪本知事命名）の充実、発展を祈念申し上げます。

この話の後日談を付記する。

昭和53年2月、この卒業長編答辞詩を詠んだ同期生の卒業30年目の初の同窓会が豊岡で開かれ、全国に散っている同級生100名近くが出席、盛大に開かれた。来賓として迎えた当時の先生方を代表して、西洋史担当の竹村越三先生に祝辞をいただいた。その中で、知る人は殆んど居ない前述の文教育創設秘話を語られ、「君たちは、文教育が設けられるきっかけづくりをした。誇りに思いなさい。」と結ばれた。一同初めて聴いた話にどよめいた。

筆者（林）は、終戦の日をはさんで前後僅か9ヶ月間だったが、疎開転入生として旧制豊岡中学校に在学しており、しかも奇縁と言うべきかその時文教育長として在任中であつたので、この同窓会に出席していた。この話を聴いた瞬間に震え上るほど感動した。早速ご挨拶させていただくと、竹村先生は、「そうだったのか、ご縁だね、頑張りなさい。」と励ましてくださった。

竹村越三先生は、昭和21年から24年迄豊岡中・高校に在職され、その後阪神間の校長を経て、阪本尼崎市長時代の同市教育長、知事時代には兵庫県教育委員会の要職に登用され、教育・文化行政の推進に貢献された。

# 思い出深い文教府

黒田 政 良

(平成 25 年度前期みてやま学園同窓会長)



今年は但馬文教府は、創立50周年をむかえました。当時、県知事であられた阪本勝氏のご尽力により但馬の芸術、文化、教育の発展に大きくスタートして、50周年をむかえたことはとても意義深い歩みであり、当時の方々に敬意を表するとともに、感謝する次第であります。

文教府は丘陵地で空気もきれいで騒音もなく、自然環境に恵まれ、最適の学びの場であります。

但馬文教府と私の初めての出会いは、1泊2日の研修でした。日中は講堂で講演を聴き夜は和室にて、それぞれの分科会で問題討議に励んだことを思い出します。

最近では平成17年に高齢者大学みてやま学園に入学して、文教府の先生方のご指導を頂いて、色々なことを学習し体験させて頂きました。

在園中には先輩や後輩の方々にたくさんの知り合いができ、卒業後はクラス会を開催したり、又、グラウンドゴルフや他にもグループを立ち上げて楽しんでおります。

同窓会事業といたしましても、年2回のグラウンドゴルフ大会を開催して、会員相互の親睦と絆を深めております。

みてやま学園に入学して、多くの友達や知り合いができたことは、私にとって大きな宝物を頂いた喜びであり、学習して得たことを地域に帰って少しでも反映できる喜びに感謝している今日この頃です。

# みてやまと共に学ぶ

河本 匡 弘

(平成 25 年度但馬文教府みてやま学園大学院学生自治会長)



文教府が創設されて50年、半世紀を迎えました。地域の皆さんが学び交流を深める場所であり職場の研修にも利用され、スポーツ施設もあり文化の向上を目指した利用がなされています。私は仕事から一線を引き、文教府に開設されている「みてやま学園」に入学してはや5年半が過ぎました。さて、この5年半の間に私は何を学んだのかなあと、今一度振り返りかえてみると、やはり新しい人を知ることと人との交じわりの重要性です。そして、地域との共生の大切さ、難しさでした。専門講座では但馬にかかわる「産業」・「人物」・「歴史」・「自然」等々で興味ある講座もあり良い勉強になりました。文教府周辺の散策では色々なものが発見できました。この見手山は、かつて山名氏の居城があったところで、妙楽寺城と呼ばれ尾根を削ったり、斜面を切りくずし急な斜面を造った遺構等が残されています。石仏もあり、古墳もあり興味のある方には楽しい散策道となることと思います。

このような思い出の詰まった但馬文教府、みてやま学園大学院が、これからも末永く続いていくことを心より祈念しております。

## 今、新たな出会い



原 田 元 紀

(平成 25 年度但馬文教育みてやま学園学生自治会長)

50年前と言えば、東京オリンピックの開催1年前、私は高校生であり但馬文教育の創立など縁のないことでした。

社会人となり、第1回文教育夏期大学のポスターを見て、横浜国立大学長洲一二教授の講演を聴けることが驚きでした。また、第2回文教育夏期大学は東京大学の内力教授、そして第4回の一橋大学都留重人教授の講演を聴きに行ったことが、但馬文教育との最初の出会いでありました。

それから、40年経って会社社会を無事に卒業し、この但馬で、新しい「出会い、楽しみ、生きがい」を模索するため、みてやま学園に入学して、あっという間に4年生になっていました。

この4年間で、教養講座、専門講座、クラブ活動及び学生自治会活動を通じて、沢山の園生に出会い交流が広がり、より多くのことを学び、更に人の輪が広がっています。

学年会のニコニコ会では、修学旅行、グラウンド・ゴルフ、演芸大会など楽しい思い出を一杯つくり続けています。

卒園しても「燃やさんいざ」、「勤しまんいざ」、「交わさんいざ」の気概を持ち続け、地域で少しでも貢献できる喜びを生きがいにしていきます。

このように新しい出会いの場や、生涯教育の礎となる但馬文教育であり続けられることを期待しています。

## 但馬文教育と私の回想



淡 島 美千代

(但馬舞踊協会会長)

但馬文教育創立50周年記念の年を迎えられ、誠にありがとうございます。この半世紀、但馬の教養の府として大勢の人がご指導を仰ぎ多くを学び楽しみました。振り返りますと、婦人生活大学1期生として通いました頃、当時の府長が上田平雄先生でありました。その後「理久の子守唄」の発表会の会場で上田先生と再会し、但馬舞踊協会結成につきご相談申し上げておりました。平成14年1月20日但馬舞踊協会設立総会を文教育で挙げていただき、発起人の1人でありました私が会長の重責を担う事になり今日に至っています。但馬文化協会、但馬芸術文化会議に入会し広い視野で学びました。但馬舞踊協会は隔年毎に舞踊発表会を重ね、流派の垣根を越えて一心となつて活動しております。本格的な日本舞踊の文化をこの地に継承したいとの信念でございます。兵庫県地域文化を考えるシンポジウムにも度々参加し、他地域の特色や名所等を見学しました。年に一度お逢いできる人達と楽しく会話したり、便りの交換等々佳き思い出でございます。また、この度、創立50周年記念式典には、私達にご指名をいただき、日本舞踊4会派の代表の方々とご祝儀曲「清元青海波」を舞うことができ光栄でございました。但馬文教育が教養の頂点として益々充実し、昂揚し、ご活躍されます事を祈念して止みません。

## 演劇を通して地元短期大学での異世代間交流



百合岡 孝 夫

(但馬文教府みてやま学園大学院 4期修了生 四季の会会長)

みてやま学園大学院では、特に自主的活動と和の大切さなどを学んだ。テーマを持ちワイワイガヤガヤと自分自身も楽しみながら交流することが地域づくりにつながると考えた。

大学院2年の時に近畿大学豊岡短期大学の学園祭に、交流として舞踊劇「桃太郎」を演じたり、食文化交流の模擬店に参加した。

これがきっかけで、近大豊岡短大から子ども学科の学生へ演劇指導の協力要請があった。

文教府のバックアップもあり、大学の先生の協力を得ながら年間を通じて、異世代間交流をするなかで、学生を支援して園児の指導等に少しでも役立つならばと思い、四季の会全体で取り組むことにした。

4月、まず衣装や大道具・小道具作りから始めた。高齢者の経験も生かしながら作業体験を通しての交流を深めた。演技でも、私達高齢者がやってきた通りに演じて見せ、学生と先生方と高齢者で練り上げる。学生は、繰り返し練習し、だんだんと上達してきた。

学生は、10月には学園祭、12月には市民プラザで「子どもフェスタ2009」で熱演。

地域の子ども達が、舞踊劇「かぐや姫」・人形劇・ダンスで目を輝かせ、歌や手作り遊びなどで一緒に楽しんだ。学生が達成した喜びを私達も共にし、一丸となった感じだった。

若者は、高齢者の何事も前向きで楽しみながら交流する姿を認めてくれたようだ。高齢者も、若者から元気をもらい、日常生活にメリハリがでてきた。あと1年、あと1年と交流を続けて、今年で5年目となる。

## 但馬文庫が新設された



國 谷 優

(但馬教育書道同人会 代表)

第10代世木貞夫府長時代の副館長、田中啓介氏の発案で但馬に関係した図書を文教府に集約して但馬のことは文教府に行けば分かるようにしようと「但馬文庫」の新設が決まりました。

当時文教府には寄贈図書、但馬各地の広報、各文芸誌などが府内の各所に保存されていましたが但馬文庫として展示することになりました。来館者は勿論但馬地域の多くの方に知らせようということでロビーに書棚を並べて但馬文庫が新設されました。田中副館長は神戸に帰省される度に必ず明石の県立図書館の協力文庫に立ち寄って但馬文庫にふさわしい図書を探し続けられ1年間で約200冊の本を譲り受け但馬文庫に入れられました。

当初展示されたのは約2,000冊でした。

その後、図書や資料が増えたので、ギャラリーの隣室に移転し、但馬文庫として環境を一新しました。現在の蔵書数は当初の約4倍の8,013冊、内貸出禁止図書は1,369冊と聞いています。県下の他の文化会館に先駆けて新設された但馬文庫。当時の担当者として、田中啓介氏の但馬文庫の新設にかけられた情熱とご尽力に私は感謝しています。昭和63年に新設された但馬文庫は、今年で25年を迎えますが、「但馬文庫が創設されて、本当によかった。」と思っております。

※尚、現在但馬文教府ロビーのガラスケースの中に、新しく寄贈された図書が展示され、寄贈者の名前、題名などが書かれています。

## 本土在住50周年記念



屋 良 景千代

(但馬生活創造情報プラザグループ  
沖縄文化研究会『とんとんみー』代表)

昭和38年、但馬文教府の創設の年、私は琉球政府立那覇商業高等学校卒業と同時に那覇の泊港から8名の同級生と本土就職の旅に出発しました。

当時、沖縄は琉球と呼ばれアメリカに占領され琉球政府の上にアメリカの高等弁務官が支配し、アメリカの統治下であり、日本に渡航するときはパスポートが必要でした。

私は、神戸に入港し、税関のチェックを受けたので、上陸してビックリしました。建物・自動車・服装・環境を見て立派でうらやましく平和な国に来たと嬉しくなったものです。

私は、大阪・滋賀・福岡・名古屋・滋賀と転職・転勤を繰り返し、昭和47年に豊岡に転勤して来ました。豊岡は住みよい所で、永住するつもりで家屋を購入し住み始めました。

そして、40年勤続で60歳の定年を迎え、みてやま学園に入学しました。同級生は90人以上でしたが、知っている人は1人もいませんでした。4年間の学園生活・2年間の大学院、そして応援隊活動などのお陰で生涯の友達がたくさん出来、友達の絆が深くなりました。また、みてやま学園の「新春放談会」で沖縄の話と民謡を披露しました。その時の会場の喝采に導かれ、沖縄研究会「とんとんみー」を立ち上げました。現在は、但馬文教府で月4回稽古を行い、そして、市民プラザサロンコンサート、ライオンズクラブなどで演奏活動を行っています。文教府に大変感謝しています。文教府50周年記念と本土在住50周年記念、運命の絆で結ばれています。感謝 感謝 感謝 感謝 感謝 ……

## 宿泊研修と文教府



小山 六良兵衛

(但馬生活創造情報プラザグループ  
『豊岡市 GGA』『豊岡学友会』代表)

但馬文教府創設50周年にあたり心からのお祝いのご挨拶を贈ります。

文教府の思い出は、教職経験のまだ浅い昭和40年代の初期、但馬文教府の宿泊棟をお借りしてのサークル活動です。旧豊岡市の11小学校の現職教諭で理科教育に興味・関心のある者達の集まりでした。何にも拘束されない自主・自立の理科サークルでした。毎月定例の土曜日をサークル活動日と定めて研修活動を続けて来ました。夏休みには、文教府で宿泊研修を実施することが恒例でした。夜を徹しての熱心な研修活動は、教師自作の簡易実験器具、動植物の飼育と採取・栽培をはじめ理科教育の基礎基本を学びました。

昭和60年頃、教育工学研究班で宿泊棟を借りました。教育活動にパソコンを導入する初期の取り組みでした。ベーシック方式でのプログラムづくりでした。授業分析、計算の誤答分析等、時間不足に苦悩しました。

平成11年、延藤府長時代に但馬高齢者生きがい創造学院にお世話になり、8年間文教府との交流を深める傍ら、同11年にみてやま学園に入学し、楽しく学ばせていただきました。

新しい友と共に地域づくりに取り組むことができ現職時代以上に多忙な日々を送らせていただいております。有り難いことです。

但馬文教府の益々の発展・充実を祈念しつつ筆を置きます。

## 但馬文教府の思い出



田 中 保  
(たじま教美展 代表)

設立50周年おめでとうございます。

20年ほど前、仕事の都合で2、3回会議室を借りました。マイクやプロジェクター、スクリーンの設営や使用方法など慣れた手順でとても親切に教わった記憶があります。冬、食堂の熱いみそ汁が旨かった。活気溢れる若い声が奥の宿舎からロビーに響いていました。

現職を退く頃から但馬美術展その他でお世話になっていますが、会議の資料、展示、広報、表彰式や後片付け、但馬美術展移動展、会計監査に至るまで、職員のみなさんがたいへんよく世話をしてくださいます。但馬美術展で下位入賞し、毎年のように、会報に載せる制作感想文を書かされたことは苦い思い出です。

ギャラリーには展示パネル34枚が常設され、ガラスケース、机、白布などが無料で使用できる便利さがうけ、4月上旬から翌3月末まで写真、書道、工芸、絵画など展示の申込みが殺到しスケジュールの調整に苦勞をかけています。

自主事業にも尽力されており、特に文教府夏期大学では知名度の高い講師を迎えるなど但馬地域への貢献は大なるものがあります。

## 但馬文教府創立50周年に想う



平 位 紘 一  
(第36回但馬美術展兵庫県知事賞受賞)

想えば、私が但馬文教府とかかわり始めたのは但馬美術展に初出展し、但馬県民局長賞を受けたのが始まりでした。同時期児玉晶仁先生より但馬美術協会委員として指名していただきましたが、さしたる働きも出来ず今日に至りました。但馬美術展には、例年出展し賞をかさねるたびに足を運びましたが、その間、文教府担当職員の方が何人も替われ、そのつと大変お世話いただきました。但馬美術展は各地の市民美術展とは一味違い、平面絵画のみの公募展として今年で36回目となりました。毎回、会場の設営から展示準備、後片づけに至るまで、但馬美術協会の会員が協力し合いながら行っております。このことで、会員同士の信頼と和が保たれているように感じております。

また、50年前は、何故あの山の上に文教の拠点として、但馬文教府が建設されたのかと思っただけですが、但馬美術展をはじめ、多くの事業が但馬文教府で企画・運営され、そして多くの方が芸術・文化などについて学ばれていることを知り、まさに但馬地域の芸術・文化・教育の拠点であると実感しました。

終わりに、但馬地域の方が芸術や文化活動を進める中で、但馬文教府の存在は心のよりどころ、中心的存在であり続けていくことを願います。

## 但馬文教府の思い出

吉岡賢次  
(豊岡こうのとり太鼓 代表)



先日、但馬文教府創立50周年と聞き、私が小学校に入った頃に出来た施設だと初めて知りました。

但馬文教府にお世話になって約5年になろうかと思いますが、始めは体育室の使用がメインで現在のパフォーマンススペースがあることすら知りませんでした。ある時に「活動登録をされると無料で使用できる部屋がありますよ。」と職員の方に聞き、すぐに登録させていただきました。以前は小学校や区、市、県の施設をお借りして練習していましたが、音がうるさいとか、太鼓の準備に2階まで毎週運び上げるなど安全面等にも問題があり、活動場所を転々としてきました。今は本当にいい場所で練習させていただいていると感謝しています。

私が初めて和太鼓に出会ったのは、1990年に社員旅行に行った先でした。胸に響く太鼓の音、心に残る太鼓の音は今でも忘れません。皆さんに感動していただき、私自身も満足のいくチームを目指したいと思い、子ども達を中心としたチームを結成しました。当初は太鼓はなく、本を重ね、物や段ボールの円柱ケースなどを叩いて練習をしていました。

子どもを預かるわけで、まずは礼儀や挨拶から指導し、その次に太鼓に触れる楽しさを教えることにしました。怒って伝えるのではなく、なるべく誉めるようにします。子ども達は誉めれば誉めるほど上手くなりました。

そこで、多くの子ども達に太鼓の楽しさをどのように伝えるか悩んでいる時、但馬文教府の但馬ゆうゆう塾を知りました。何回か体験教室や普及活動をさせていただき、少しずつですが、和ができていくなど感じています。今後も継続的にやっていると、今強く思っています。

最後に、私は高校時代に交通事故にあい、地元の病院関係の方々や地域の方に大変お世話になり、私も地元に戻ったら何か少しでも地元の為に出来る事がないかと思案している時に、和太鼓に出会いました。でも、私は軽い障害を持っています。障害を持つ私でも目標を持ち、仲間と共に、やり続ければここまでやれる、この事も、今後は伝えて行きたいと思っています。

## 但馬文教府と私

金子達也  
(但馬文教府 結婚式 挙式者)



小学生の夏休み、早朝5時半、兄に起こされ自転車に網と虫籠を積んで眠い目をこすりながら「みてやま」へ向かいました。うっそうと繁った小枝の間を、朝露に濡れながら必死に兄の後を追いました。国蝶のおおむらさきは、半日がかりの戦果でありました。豊高生の頃、「みてやま」が文教の府に様変わりしました。昭和48年結婚、叔父の上田平雄が但馬文教府長をしていて、但馬文教府で人前式となりました。ロケーションは素晴らしく申し分ないのですが、会場が狭く、式から披露宴のどんでん返し、料理のセッティング、音響、進行等、東京の大学の友人にまで手伝ってもらった始末で冷汗ものでしたが懐かしい思い出です。その後、但馬文教府が発行する多くの書物に親しみ、文教府夏期大学では、3年に1度程度の参加であったが、中央の第一線の文化人のパワーを吸収することが出来ました。

平成19年「みてやま学園」に入学しました。大学4年間、大学院2年間を無事修めることが出来ました。現在は、週2回のシルバーダンスでは、但馬文教府の体育室で汗を流し、生きがい創造学院の書道教室に属し、展示室の2週間毎に変わる展示物に刺激を受けながら、心身の老化とたたかっています。昭和38年、県下に先駆けて開設された但馬の文教の拠点施設である「但馬文教府」、多くの事を発信し、牽引していただいた50年、心より感謝申し上げます。

## 昔の但馬文教府を思い出す

中井和代  
(元但馬文教府職員)



当時「但馬文教府」という名前を聞いて、「変わった名前だなあ」と思ったものです。しかし、阪本勝元知事の文を読み、名前の由来を知った時、「何と格調の高いものが但馬にできたものか」と思ったことを覚えています。

昭和38年11月30日、但馬文教府完成。その日は但馬では初雪が降り、化粧をしたような景色の中、竣工式を迎えました。翌日12月1日開館。開館当日から大いに賑わっておりました。

設立当初は、現在の本館と宿泊棟（現在の生活創造プラザ）のみで、現在の文教府ギャラリー、但馬文庫のある建物は資料室として、昭和40年度に建てられました。

昭和43年、天皇・皇后両陛下が但馬文教府に御幸啓されたことは忘れられない思い出です。何ヵ月も前から県庁の職員の方が中心になって準備しておられました。本館の府長室前のトイレは、3日前から消毒して、当日陛下がお帰りになるまで誰も使えない状態でした。

振り返ってみるといろいろなことが思い出され、但馬文教府が私にとってかけがえのないものであることを改めて実感しました。

## 但馬文教府の50年

森田泰男  
(但馬文教府内喫茶店主)



但馬文教府は、建設作業のコンクリートを練ることや、それを運搬するためのバケツリレーなどの作業を戸牧地区の住民が協力することで完成にいたりしました。

昭和38年の完成当時、但馬文教府の車道は妙楽寺側の1本だけで、戸牧側は砂利道を階段で歩いて登るしか方法がありませんでした。

創設当時を振り返ると、館内にプラネタリウムを観ることができる部屋がありました。また、サマースクールにおいて天体望遠鏡を使った活動もしていました。私は、当時、館内の食堂で働いており、学生や会社員の方が宿泊施設を利用されていたので、食堂がいっぱいになり、忙しかったことを覚えています。

この50年間でまず思い浮かべるのは、雪の降る朝、家から但馬文教府まで通うのに苦労したことです。大雪の朝に宿泊のお客様の朝食を準備しに行こうとしたのですが、文教府に登る途中で車が進まず、道中に車を止めて、歩いて登ったこともありました。道も良くなり、早い時間に除雪も行われている現在では考えられないことですが、今となってはそれも良い思い出です。

## 但馬に生まれて



足立 彰

朝来市立梁瀬中学校1年

(平成23年度第45回小・中学生作文・詩集「但馬の子ども」森はな記念賞受賞)

但馬文教育創立50周年、おめでとうございます。その記念誌にこうして原稿を寄せることが出来、大変嬉しく思っております。ありがとうございます。

僕と作文・詩集『但馬の子ども』との出会いは、小学校入学の年で、以来何度か入選・特選等頂きました。中でも特選・森はな記念賞受賞の嬉しい知らせが届いたのは5年生の時でした。

当時、夏休み前から「今年は大好きな祖父のことを作文に書こう」と決めて、早速取りかかったことを覚えています。

そこで分かったことは、祖父はどんな重労働も家族のため牛のために、生命の重みを感じながら汗を流していたということです。

現在、祖父は82歳。まだまだ元気に好きな牛飼いを続けています。そして僕たち家族を守ってくれています。

受賞時の作文で僕は、祖父のようなおじいさんになることが夢だと書きました。今もその夢に変わりはありません。将来、僕によく似た孫から誇りに思われる祖父のようなおじいさんになりたいと思っています。

これら但馬に生まれ、但馬に育ったからこそ感じる事が出来たこと、そしてそこで学んだことすべてが僕の大切な宝物です。

ふるさと但馬のぬくもりを忘れずに、自分に出来ることを精一杯出来る大人になりたいと思います。

## 森はな記念賞をいただいて



松本 寛生

朝来市立生野小学校6年

(平成24年度第46回小・中学生作文・詩集「但馬の子ども」森はな記念賞受賞)

今年も畑でたくさんの野菜がとれました。おばあちゃんが小松菜のジュースや夏野菜たっぷりの特製ピザをよく作ってくれます。

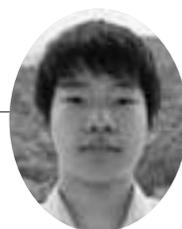
「どれもおじいちゃんの畑の野菜やで。」と、うれしそうに話してくれます。お母さんも畑から野菜をもらってきて、いろんな料理を作ってくれます。

そんな毎日の生活を書いた作文ですばらしい賞をいただけて、とてもうれしかったです。いろんな人に「おめでとう。」と、声をかけていただきました。おじいちゃんやおばあちゃんに生ごみを使った土作りを聞きに来られる人もいました。ほくにとっては普段と変わらない日常生活が、表彰していただいたことで少し特別になったような気がします。おじいちゃんやおばあちゃんが一生けん命してくれていることがほめてもらえたみたいでうれしいです。

今年は家族が増えて、ますますぎやかになりました。ほくたち兄弟も少し大きくなったので、手伝いなどできることが増えてきました。自然豊かな生野での当たり前のぎやかな生活も、他の人にとっては当たり前ではないのかもしれないと思います。

ほくの家の畑は、これからもみんなの力を合わせ、みんなが集まる楽しい場所にしていきたいです。そして、家族全員毎日を元気に過ごしていきたいです。

## 海と僕



宇野 拓実

新温泉町立浜坂中学校 3年

(平成 23 年度 第 44 回科学する但馬の子ども作品展 但馬県民局長賞受賞)

海と僕とは、切っても切れない関係です。それは、研究を進めるにつれて、一層深まってきました。

僕は、よく隣の鳥取県にある鳥取県立博物館附属山陰海岸学習館へ行っていました。そこで、学芸員の方に「ヤドカリの研究をしてみないか」と声をかけられました。始めは、「ヤドカリで研究が深まるのか」と思いました。それでも、「ヤドカリは、とても身近な生き物で、この地域のことは、誰も調べていないだろう」と思い、調査することにしました。すると、思っていた数よりも、多くのヤドカリが見られました。たくさんの数を調べることで、ヤドカリには、好きな貝があること、それぞれの砂浜や海岸で違った組成があることなどの新しい発見がありました。

地域の知らないことを、ヤドカリが教えてくれました。新しい発見をすることは、誰かに伝えたいという思いが湧いてくるということです。それは、次の研究の一步となり、研究を続ける強い動機付けとなりました。

但馬文教育には、毎年研究を展示していただき、とても感謝しています。賞と共に伝える場を与えていただいたことは、大きな励みとなりました。

海は、僕にとってまだまだ未開の地です。海と僕との関係は、永久に途絶えることはありません。これからも、新しい発見を求めて、足を運んでいきます。

## アリジゴクの不思議発見その2～巣作り名人のまき～



木山 実咲

豊岡市立五荘小学校 5年

(平成 24 年度 第 45 回科学する但馬の子ども作品展 兵庫県知事賞受賞)

「おや?これは何だ?」「どんな仕組みや役割があるのだろうか?」と不思議に思ったことを観察、実験していく中で様々な驚き、発見ができることが自由研究の一番の楽しみです。

私は3年生の時にアリジゴクについての研究をしました。その中でも特に「巣の作り方」はおもしろく興味深かったです。そして、4年生では「巣」についてさらにくわしく調べてみました。

大あごで土をふるいにかけて、大きいつぶの土は遠くへ、小さいつぶの土は近くに投げ飛ばす。そして、上手にすりばち状の巣を作ります。その巣をよく見てみると、左右の角度がちがうことに気がきました。えものが逃げやすいゆるいしゃ面の方に、土をかける体勢でひっそりと巣の底で待ち、すりばちに落ちてきたえものに「シュッシュッ!」と土をかけながら引きずりこむハンターぶりに「生きる力」「強さ」を感じることができました。また、土の中でしんぼう強くえものを待ち構え、えさが少ないと判断すると巣を引っこし、新しい巣を作り生きのびようとします。そして、となりの巣にぶつからないように遠りよしながら巣作りをする思いやり、ゆずり合いの優しい気持ちも持っているアリジゴク。

巣作りを通してアリジゴクが「生きぬいていくための」知恵と工夫、そしてたくさんの不思議を発見することができました。本当にアリジゴクは巣作り名人だと感じました。

アリジゴクは土の中にまゆを作り梅雨時期に羽化をし、ウスバカゲロウに変身します。私は、まだ一度も羽化する様子を見たことがないので必ず見てみたいです。

私は、1年の時から、この作品展に出品し、4年連続で特別賞を受賞することができました。研究の成果をまとめるのは大変でしたが、がんばって研究して、よかったなあとうれしく思います。

私は、これからも「不思議だな?」「何でだろう?」と思う気持ちを大切に、新たな驚き、発見をしていきたいと思っています。そして、その驚きや発見を「科学する但馬の子ども展」に出品していきたいと思っています。

但馬文教府  
への期待  
～但馬に寄せる思い～



# 但馬文教府よ永遠なれ

欄 田 一 文  
(第18代 但馬文教府長)



但馬における生涯学習の中心、拠点、聖地等々、類する語はいずれも文教府にふさわしい言葉だと思います。それは多くの人々が集まり、活動の足場となる重要な地点であるのみならず、歴史とともに培われた信頼感、またあこがれを持たれるところであるからです。

文教府は、文化活動、地域活動という枠にとらわれることなく、開設当初からの理念、「但馬における文化、教育振興の基地」として、子どもから高齢者までが参加できる事業を展開されています。小・中学生を対象とした科学展や作文・詩集は子どもたちに文教府の存在を大変印象深いものとし、早い時期に確立した信頼感や期待感は生涯にわたり続くものだと思います。そして、一般対象の公開講座や講演会、芸術文化の発表会・展示会、さらに、学び続ける高齢者対象の高齢者大学や市町高齢者大学との交流推進等々、文教府の活動は、他の地域ではあまり見られない広範囲、高次元なものとなっています。

さらに、私がお世話になっていた平成16年、台風23号による豪雨で豊岡市内が大きな洪水被害を受けた際のことで、近隣の方約100名が文教府に避難して来られました。みて山上の文教府は水害には強いとの思いからでしょう。避難所としての4日間、その間、夜中に妊婦さんが破水され、救急車を要請したところ、他県の救急車がやってきたということもありました。その際も、文教府は市民の皆さんから信頼の置ける場所として見られていると実感しました。昨今、地球温暖化の影響で豪雨や暴風の被害が年々増しているように思いますが、防災の観点からも文教府は重要な役割を担うことができると思います。

生涯学習の拠点として様々な事業を実施するというソフト面のみならず、施設としてのハード面においても信頼され、但馬の皆さんが心の奥底から存在を感じることができる文教府で在り続けていただきたいと熱望しています。

個人的になりますが、文教府を運営する兵庫県生きがい創造協会に、今年の4月から職員としてお世話になっており、高齢者放送大学業務に従事しています。文教府の今の動きを間近に見聞きできるようになるとともに、懐かしい但馬の皆さんとご一緒する機会が増え、文教府に対するこの思いをますます強くしています。

# 但馬文教府の歴史に 但馬の光を見る



松田 義人  
(第19代 但馬文教府長)

但馬文教府での生活は本当に充実していました。「文教府」という名称に秘められた阪本勝元知事の思い、それに応えて但馬の発展を、特に文化の興隆を目指し励まれた先輩諸氏の歩みとその口と活動を通して知ることができ、現に文教府がその活動の中心的拠点であり続けている姿をそれに関わる一人として見るのができたからです。

創成期には各市町村から若者が集まり、熱く学び、地域づくりの原動力となりました。また、様々な分野の文化団体が活動するとともに但馬が一つとなり「但馬文化協会」が文教府との連携のもと但馬の文化の発展に努められました。私が文教府に在籍した平成18年度には「自然や人、文化との共生の社会づくり」をテーマとして「地域文化を考えるシンポジウム」を開催し、全県、全国へと「コウノトリとの共生」をはじめ但馬で展開されている未来志向の社会、文化の在り方を発信することができました。この内容は画期的であり、今こそ追い求めていかねばならないものと改めて思い起こすものです。

但馬の魅力は人にあります。文教府は人を一つとする場所です。子供たちから高齢者まで、ここで学び、活動することを通して「但馬人」としてのアイデンティティをもつことができたのではないのでしょうか。子どもたちの豊かな感性、探究心が、そして高齢者の皆さんがその豊かな体験の上に展開する「みてやま学園」での躍動的な活動、どれを取り上げてもそれに参加するお一人お一人のもつ豊かさを見ることができます。また毎年、あの豊岡市民会館を人で一杯にする「文教府夏期大学」も文教府のもつ大きな役割を象徴しています。

文教府が、但馬にあってその魅力を発信する者、一方で遠くにあつてふるさと但馬のすばらしさを思い起こす者、但馬に来てその魅力に引き入れられる者、共に但馬を愛する人々を一つにする拠点であり続けていただきたいと願います。これまでの文教府の50年の歴史の中から、これからの文教府の歩むべき道を照らす明るい光が発せられていると思います。私も、但馬文教府、但馬の文化のますますの発展を熱い思いをもって応援させていただきます。

# 但馬文教府 創立50周年に思う

石井 稔  
(第20代 但馬文教府長)



但馬文教府は阪本勝元兵庫県知事の命名によるもので、但馬における文教、文化と教育の基地との意であります。私が文教府で勤務したのは、平成20年4月から平成22年3月まででしたが、その間、多くの方との出会いがあり、その中で、文教府が基地として果たしてきた様々な役割に気づかされました。

創設以来、但馬文教府は但馬の人々が結集し、文化・芸術や教育だけでなく地域振興についても考える場(=基地)でありました。そして、その歴史の中で文教府夏期大学をはじめとする各種の文化事業が生まれ、引き継がれてきたのです。また、生活科学館の活動の中から但馬の暮らしの改善運動も進められてきました。

私が勤めた時期は文教府の変換期ともいえる時期でした。県の機構改革で独立機関から県民局の内部機関に変わって3年が経ち、新しい組織運営が軌道に乗りつつある中で、我が国の消費者行政が大きく転換され、生活科学センターの役割がクローズアップされ、本庁、県民局の全面的なバックアップと各市町の協力を得て、県と市町の消費生活相談員が合同で消費者相談を行う「但馬消費者ホットライン」を創設することができました。また、文化・教育関係の諸事業においても、財政難による組織・予算の縮減の中、全面的な見直しを図り残すべき事業を精選するとともに、新たな取り組みとして、みてやま学園大学院と近畿大学豊岡短期大学との連携による実践活動を始めました。また、生活創造プラザ事業を新たな柱と位置付け、但馬の様々な団体に活動の場を提供するとともに、お互いの交流を促進し、但馬の活性化に資するようにと考えました。まさに、但馬の人々が集う基地として役割を事業化したわけです。

創設から50年が経ち、文教府の組織の在り方も時代とともに変遷し、今では生きがい創造協会に管理が委託されましたが、明日の但馬を目指して人々が集う基地としての文教府の役割は変わっていません。これからも文教府が基地としての役割を果たし続けることを期待しています。

## 但馬文教府への期待 ～「村を育てる学力」の精神を～

加古博志  
(第21代 但馬文教府長)



創立50周年おめでとうございます。平成22年度の1年間だけ勤務させていただいた。思い出深く、濃い1年間でした。生まれて初めての単身赴任で落ち着くまもなく、みてやま学園大・大学院及び生きがい創造学院の入学式。そして近大豊岡短大とみてやま学園との協定式や生活科学センターとして「但馬消費者ホットライン」の事業展開等、目の回る日々を過ごした。職員の皆さんには、本当によく働いていただいた。忙しさの中にも、豊岡おどりを皆さんと踊ったのを鮮明に覚えている。かぶり物をしていた職員もいた。すべてが楽しかった。

但馬には夢がある。自然豊かであり、コウノトリの野生復帰に代表される先進性がある。長寿社会であり、植村直己や斎藤隆夫に代表される希有な但馬人の活躍がある。但馬文教府に期待するところは、もちろん後者の人材育成である。

阪本知事の当初の目的は、果たしてきたのではないか。今後、100周年に向けて、どういう機能を文教府が果たしていくのか、しっかり見据えて考える必要がある。

但馬文教府が、これからも地域発展のシンボルで、文化の中心で、人材育成の場として、価値ある存在であって欲しい。池田草庵の青蹊書院のように、文教府が但馬の人材養成を担ってほしい。県が標榜している参画と協働をどう進めるのか、その人材を多く輩出し、活動グループのリーダーを育てたい。

但馬の人が豊かな人生を送ることができるよう、良質の文化を学習できると共に、その成果を適切に生かすことのできる仕組みを構築したい。学びと実践を一体化し、地域の創造に共に歩める人材を、グループを、多く育てる必要がある。高齢者大学の方が、但馬の誇りと課題に気づき、但馬の自慢や誇りをパワーに変えて、少しでも地域の課題解決を図って欲しい。

東井義雄は、立身出世だけに進学の道を求める教育は国を滅ぼすもので、「村を育てる学力」は村や町を育てる学力であり国を育てる学力と説かれた。生涯学習者において個人の趣味、要望は大切であり入り口であるが、社会の要請が重要である。今一度、東井義雄の「村を育てる学力」の精神を、生かしたい思いである。

## 但馬文教府への期待



籾谷 力夫

(但馬ふるさと芸術文化振興事業実行委員長)

創立50周年おめでとうございます。

昭和38年但馬文教府が創設されて以来、但馬の文化、芸術、人づくりの拠点として揺るぎない地歩を固めて来られました。文教府夏期大学のような但馬の誇るべき財産ともいえる実績をはじめ、永年にわたり、但馬の文化芸術の振興や生涯学習の充実発展に尽くして来られましたことに対し、深く敬意を表します。

こうした歴史を重ねる中にも、文教府創設当時の新幹線開通や東京オリンピック開催などの時代から半世紀を経て、但馬も人口減少や少子高齢化などの課題に迫られています。世の中は成熟の時代といわれ、価値観が多様化し多様な生き方や多様な文化が求められています。

コウノトリの野生復帰や山陰海岸ジオパークなど但馬特有の自然や文化が世界に認知され、但馬の地域力再生も起動されています。但馬の美しい自然、伝統的な民族芸能など、但馬の個性は多彩です。ますます文教府の蓄積された英知と地域力の発揚が期待されます。

文教府が、常に新しい時代の要請に対応して、但馬の文化芸術の振興、人づくりの拠点として、文字通り、文教の府を確立されますよう期待し祈念いたします。

## 但馬文教府と連携協定締結による学生の育成



長谷川 定宣

(近畿大学豊岡短期大学長)

本学は、平成20年から但馬文教府みてやま学園大学院修了生「四季の会」、平成21年には但馬文教府みてやま学園大学院と交流授業を進めてきました。平成22年に交流をより深化させ、双方の持つ教育資源を活用し、生涯学習の振興及び生活創造の推進を図り、地域社会に役立つ人材の育成を目的として、但馬文教府と近畿大学豊岡短期大学は連携協定を締結しました。

みてやま学園大学院生と本学学生との社会福祉や保育に関する交流授業や本学大学祭「育ち合いの仲間づくり」、「地域交流“食のフェア”」に参加いただいております。

また、四季の会の皆さんには、本学1、2年生合同の総合演習・卒業研究の年間を通した2時間連続授業の中で、オペレッタや地域の食材を生かした料理教室の指導、よさこいクラブの衣装作製に毎週来ていただいております。

このように但馬文教府という教育資源と大学教育をつなぐことで、学びの共有化が図られ、学生は人生経験豊かな「みてやま学園大学院生・四季の会」との多様な出会いと交流の中で、対人関係やコミュニケーションのあり方を実践的・効果的に学ぶ機会となっております。

この取り組みは「知識伝授型」の従来型教育から、現代社会のニーズに沿った教育手法への転換であり、社会に役立つ人材育成に効果が大きいことが立証できれば教育界全体にとっても意義深いものといえます。

## 明日の但馬を担う



岡田 剛  
(神戸新聞但馬総局長)

但馬文教育創立50周年おめでとうございます。

但馬地域の文化芸術の振興、ふるさとへの愛着を持つ“人づくり”を目指した「但馬文教育」50年の歩みを振り返りますと、その時代ごとに抱えていた問題に真摯に応えられていたことがうかがえます。

今、但馬が抱えている問題とは、少子・高齢化だと言えます。地域コミュニティーが崩壊するなど地域が衰退していく中、地域の活性化が急務であります。

地域の活性化、地域振興といえば、企業の誘致・観光振興のための施設建設などいずれの地域でも行われています。しかし、それだけでは地域の活性化はできません。それら施設を利用しつつ、地域に眠っている魅力、文化・産業・歴史・景観などを再発見し、活用していくことが大事なことであるはずです。

但馬文教育「みてやま学園」の設立趣旨に「実践的な社会参加活動について学習し、地域づくり活動に主体的に取り組む意欲を醸成するとともに実践者を養成する。」とあります。

高齢化、いや長寿社会という社会インフラの充実した但馬地域に文教育という長寿社会を活かすための施設がある意義を50周年という記念の年、新たな半世紀のスタートの年に「明日の但馬」を担う人材の養成に敬意を表します。

さらに、今後の活動として、創立当初は取り組まれていた青年層を対象とした活動、地域の若手リーダー作りなどに大いに期待します。

## ふるさと但馬を!



村尾 輝之  
(但馬小学校長会長(朝来市立梁瀬小学校長))

但馬文教育創立50周年。半世紀に及ぶ様々な事業が展開されている中で、「科学する但馬の子ども作品展」は46回を、さらに、「小・中学生、作文・詩集」は47回を重ねている。但馬の小・中学生の科学への興味関心を高め、また、言語力の育成に、これらの事業は大きな成果を上げている。また、このことは、子どもの力だけではなく、我々指導者のレベル向上にもつながっている。

この作品展の注目すべき特徴は、但馬に根ざした生活体験を題材として作品化していることである。ふるさとに愛着をもつことが特に求められている今日、ふるさとの自然や生活、歴史や文化に向き合い、その中で研究対象を見つけ取り組んでいくことがふるさとへの意識を育て、やがては、郷土愛につながると考えている。

しかしながら、都市化・情報化の進展により、但馬らしさ、但馬の特性を探して作品を創り上げることがなかなか難しい時代となっている。それでも、そのヒントは、これまで積み重ねた50年の貴重な実践の中に確実に存在している。先輩たちの努力と挑戦の足跡に敬意を払うと共に、ふるさと但馬にこだわるこの事業がさらに継続、発展することを願うばかりである。



本館ロビー



但馬文教府の  
あゆみ  
[昭和38年度～平成25年度]



兵庫県教育委員会において但馬文教府建設構想に着手(昭和35年11月1日)  
 昭和36年10月県開発公社の用地買収完了し、同年12月県財産として取得(昭和36年12月15日)

## 昭和38年度

但馬文教府竣工

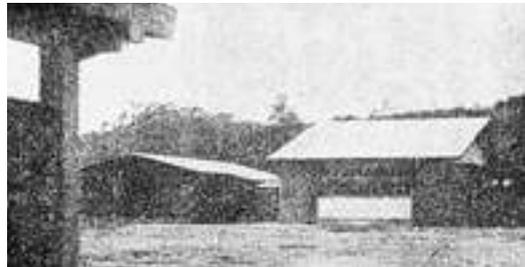


## 昭和39年度

産業文化講座(書道・文芸・農業・中小企業・観光・食生活・社会生活)  
 文教府通信1号発行  
 但馬開発推進会議  
 但馬農山漁村の実態調査  
 但馬教育塔建立



但馬経済文化人懇談会  
 生活科学館竣工



但馬に伸びる若い芽のつどい  
 市町長連絡協議会  
 未婚女性の結婚に対する意識調査  
 文教府開設1周年記念懇談会  
 オリンピック東京大会体操選手招待模範演技大会  
 常陸宮ご夫妻文教府ご視察



社会生活講座

## 昭和40年度

生活科学講座  
結婚教養講座



科学講座  
生活習慣について調査  
産業後継者調査  
資料館竣工



但馬文化財研究調査  
青年実技講座  
但馬青年放送討論会  
産業文化講座(水産)  
文教府結婚式  
文化振興会議  
但馬開発推進会議同友会結成



## 昭和41年度

招待バレーボール試合  
(ニチポー貝塚チームと東洋紡守口チーム模範試合)



産業文化講座(商業)  
文化講演会  
但馬史研究調査  
但馬史研究会発足  
資料整備会  
戸牧側道路の改修すすむ



生活の要求についての意識調査

## 昭和42年度

生物学会  
文教府生活大学開講

レクリエーション指導者講習会



但馬開発と教育を考える研究会  
民芸講座  
農山村体力づくり大会  
専修大学卓球部招待試合  
農村の意識並びに実態調査  
生活の科学化の推進に努力(知事賞受賞)  
動植物岩石名づけの会  
但馬青年講座

但馬の歴史を考える会



但馬小中学生作文集(たじまを考える子供作品集)発刊

## 昭和43年度

兵庫県立豊岡生活科学センター開設



但馬開発と産業を考える研究会  
但馬開発と自治を考える研究会  
アマチュア無線実技講習会

文教府夏期大学開始



科学する但馬の子ども作品展開始  
天皇・皇后両陛下但馬路行幸啓にあたり文教府及び  
豊岡生活科学センターご視察



但馬青年活動発表討論会  
但馬における過疎の実態と行政のあり方  
青年フロンティア研修会  
豊岡生活科学センターニュース創刊  
生活科学センター生活大学開講

## 昭和44年度

但馬市郡婦人会連絡協議会事務局設置  
ミスのための生活講座



小学校教員理科実験講習会



20才のつどい



体力だめし

部落問題研究会  
但馬TVA推進会議  
よりよい移動販売者を目指しての懇談会

## 昭和45年度

管内市町連絡協議会



学校経営研究協議会

生活科学センター生活大学が「くらしの大学」に名称変更

但馬の教育問題を語る

近畿青年の家研究協議会

市町社会教育主事研修会

但馬の公害を語る

消費生活相談員設置

コンピュータ入門講座

但馬青年活動研究集会

文教府老人学園開設

生活科学車しあわせ2号完成



「豊岡くらしの会」設立

練炭こたつによる中毒防止啓発



## 昭和46年度

社会教育研究協議会

全但結婚相談連絡協議会

青年連絡協議会

文教府県民大学

但馬を考える座談会

但馬教育を拓く研究会

同和問題座談会

オリエンテーリング講習会

但馬開発推進会議同友会より記念庭園贈呈

くらしの1日教室開始

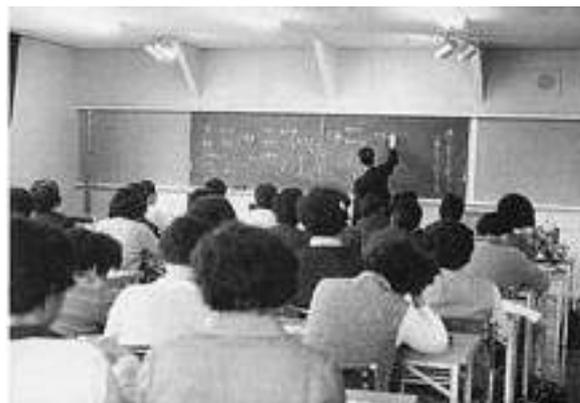
消費者懇談会



過大包装の追放運動

食生活研究会

生活科学研究会



消費者教育担当者講座

市町等担当職員研修会

消費者問題研究会

## 昭和47年度

但馬文教府創立10周年・生活科学センター  
開設5周年記念行事



明日を開く但馬フォーラム  
婦人ボランティア研修  
婦人社会学級  
文教府通信を「たじま」と名称変更  
社会同和研修  
文教府開設記念講演会

但馬地区消費者団体連絡協議会設立



出石町で消費者団体結成  
生活科学講座  
商品研究会  
消費者・事業者等懇談会  
見手山橋完成  
「但馬の食べもの」発刊

## 昭和48年度

「但馬の城」編集委員会  
文教府老人学園自治会  
婦人会よりピアノ贈呈  
但馬文化協会設立  
但馬同和ゼミナール  
但馬を考える懇談会  
婦人教育指導者研修会  
「但馬の植物」編集委員会

第1回但馬地区消費者大会開催



第1回但馬音楽祭



音楽研究会  
第1回文教府マラソン大会



関宮・八鹿・山東・生野・村岡・大屋・和田山・美方の各町で  
消費者団体結成

## 昭和49年度

余暇講座  
 但馬の文化を語る会  
 若人社会学級  
 まちづくり研究会  
 但馬の古墳調査委員会

婦人生活大学開講



中学生・高校生のための夏期講座  
 文学講座  
 くらしのアンケート実施

消費者教育セミナー



幼児学級開講  
 視聴覚ライブラリー開設  
 朝来・温泉両町で消費者団体結成

## 昭和50年度

野外活動初級指導者講習会  
 10周年記念「但馬をひらく会」  
 文教府青年会議  
 フォークダンス講習会  
 文教府道路を豊岡市へ譲渡  
 但馬の文化振興を考える懇話会  
 浜坂町で消費者団体結成、全市町に消費者団体誕生  
 美術鑑賞講座

但馬開発推進会議同友会創立10周年



くらしのアイデア作品展



「但馬の城」出版



## 昭和51年度

青年団体指導者研修会  
 少年団体指導者研修会

植村直己講演会



青年ふるさと運動  
 絵画教室  
 植物調査研究会  
 但馬婦人歌声のつどい  
 但馬地区読書活動研究会  
 資源問題を考える集い  
 灯油の価格調査の実施  
 第1回但馬文学のつどい開催

戸牧地区老人会奉仕作業



## 昭和52年度

文教府老人学園を文教府みてやま学園に名称変更  
但馬写真同好会モデル撮影会



但馬地区幼児教育講座  
婦人ボランティア育成講座  
青少年地域活動  
豊岡生活科学センター創立10周年記念行事開催

食生活専門講座



生活科学講演会  
手づくり保存食発行  
消費者団体の活動に関する展示開始  
消費者問題懇談会



## 昭和53年度

但馬地区乳幼児教育講座  
文教府講堂兼体育室竣工



第1回但馬美術展開催



婦人リーダー研修  
サマー教室  
家庭バレーボールリーダー研修



社会体育指導者研修会  
体力づくり教室  
体力づくり県民大会  
成人教育講座

消費者団体による石けん使用運動推進  
手づくり講座  
科学する但馬の子ども研究集録創刊

## 昭和54年度

グループリーダー研修会  
 「但消連だより」創刊  
 管理リーダー研修会  
 ふるさと文化講演会  
 第1回但馬合唱祭開催  
 食生活講座



文教府みてやま学園創立10周年記念事業



但馬美術協会設立  
 ヤングのつどい

## 昭和55年度

ジュニアリーダー研修会  
 生活文化セミナー  
 婦人生活大学合同研修会  
 但馬のくらしと文化を考える研修会  
 ボランティア但馬の集い  
 但馬音楽グループ活動研修会  
 但馬青年のつどい  
 ひょうごユースセミナー・サマースクール開始



物価モニター研修会  
 太陽熱温水器の年間使用テスト結果のまとめ

ひょうご文化100選に選出される



## 昭和56年度

但馬カルチャー'81  
 物価問題講演会

物価問題入門講座  
 地域文化を考える町民のつどい  
 婦人教育協議会

第9回但馬地区消費者大会に中学生が参加し提言



## 昭和57年度

兵庫県立但馬生活科学センターに名称変更



但馬文化の集い  
地域改善ゼミナール開講  
文化活動交流研修会  
地域交流美術展  
但馬生活文化展 但馬の食生活展

但馬文教府創立20周年・生活科学センター創立15周年記念行事開催



物価問題研究会  
但馬の食べもの集「但馬食べもの風土記」まとめる  
加工食品利用実態調査

## 昭和58年度

社会体育リーダー養成講座家庭婦人バレーボール講習会  
ビデオ機器活用研修会  
高校生ボランティアリーダー研修会  
但馬文化協会「兵庫県文化賞」受賞  
但馬文化協会創立10周年



婦人の役割を考える会  
青少年の社会参加を進めるつどい  
小中学生省資源・省エネルギーポスターコンクール開始



文教府文化大学開講



消費者問題講演会  
但馬有線放送により一般消費者への啓発開始  
家庭婦人シニアバレーボール大会

## 昭和59年度

生涯学習を考える会



消費生活相談のまとめ「たじまのくらし」発行

但馬開発推進会議同友会創立20周年



生活科学通信講座開始

## 昭和60年度

生涯学習講師団の派遣

婦人生活大学(健康・家庭、生活科学研究科)



物価とくらしの入門講座

地域こども移動劇場

文教府開放事業

婦人政治講座

但馬っ子の食文化

市町婦人リーダー研修会

但馬文学のつどい10周年



訪問販売の相談激増

## 昭和61年度

婦人生活リーダー養成講座



婦人生活大学健康・家庭ゼミナール

県立大学特別公開講座

くらしのクリエイター制度発足



但馬史研究会20周年



但馬っ子を考える会

文教府青年会議「村尾育英会賞」受賞

兵庫県婦人生活大学2年制となる

## 昭和62年度

但馬文化祭  
地域文化プロデューサー養成講座



小中学生・作文・詩集発刊20周年



「広報たじま」座談会

但馬文教府創立25周年・但馬生活科学センター  
創立20周年記念事業



## 昭和63年度

英会話講座  
「但馬文庫」開設



食生活研究会



くらしの道具展

中国語講座

ひょうご舞台芸術セミナー



まちとむらを結ぶ食料教室



物価問題懇談会(平成元年)  
消費者月間関連事業始まる

## 平成元年度

食文化と民具展



婦人教育指導者地域実践交流事業



くらしの通信講座

文教府みてやま学園創立20周年



地域文化振興講座

## 平成2年度

事例研究会

兵庫2001年計画分野会議

但馬生活科学ゼミOB会発足

子育て文化講座



但馬学研究会事務局設置

女性学習指導者地域交流事業

外国語と交流学习

ふれあいの祭典文化イベント「民謡・民舞のつどい」



県民鑑賞劇場(学校公演)

ふれあいの祭典 第1回但馬ふれあい美術展



たじま教美展美術鑑賞 特別講座

青少年団体指導者研修会

文教府ギャラリー特別講座

エコロジカルな暮らし展示

生活問題懇談会

一兵庫のまつり—ふれあいの祭典'90文化部門設ける

## 平成3年度

生活問題研究会

兵庫県生活創造大学女性コース開講  
(女性問題学習コース・特別コース)



但馬リサイクル推進委員会設置

女性政治講座

ふれあいの祭典'91 地域文化イベント「社交ダンスのつどい」



トレーリサイクル運動開始

ふれあいの祭典文化イベントふれあい大賞受賞

研修館を取り壊し、跡地を第2駐車場として整備

国際交流学習会開催



講堂兼体育館に冷房設備を新設

庁舎周辺の緑化作業実施

## 平成4年度

但馬生活科学センター事務室移転

トレーリサイクル運動10店舗に拡大



生活創造大学(環境セミナー・女性セミナー)開講



兵庫県美術家同盟会員巡回展開催

兵庫県文化協会文化シンポジウム開催

但馬文教府創立30周年・但馬生活科学センター  
創立25周年記念事業開催



## 平成5年度

男女共生セミナー開設  
文教府まちづくり研究講座開設  
ヤングのつどい  
国際交流学習会開催  
文教府美術講座開催



ボランティア研修会開催



兵庫県生活創造大学女性セミナー・環境セミナー開催  
ひょうごユースセミナー(乗馬体験)開催



短期大学特別公開講座開催  
サマースクール(自然まるごとウォッチング)開催

## 平成6年度

第27回文教府夏期大学、ノーベル化学賞受賞  
福井謙一氏講演  
青少年団体指導者研修会開催

コウノトリセミナー・スクーリング開催



ボランティアリーダー研修会開催

地域改善但馬ゼミナール開催

シニアバレーボール大会開催

ユースセミナー(ほくらは海の探検隊)開催



但馬理想の都の祭典に関する会議開催

くらしのクリエイター事業を県消連に委託

但馬リサイクル推進委員会を但馬地域生活環境づくり  
推進会議に改称



## 平成7年度

ボランティアリーダー研修会開催  
阪神・淡路大震災のボランティア活動(宿泊の受入)  
国際交流学習会開催



地域文化大学開催



社交ダンスのつどい  
生活創造大学生生活環境づくりセミナー開講  
起震車による震動体験研修会実施

## 平成8年度

但馬ふるさとづくり大学



生活創造講座「まちづくり研修会」開催



市町担当者研修会開催  
物価問題研修会開催



## 平成9年度

但馬史研究会30周年記念式典実施  
青年会議・青少年サロン開催  
第30回文教府夏期大学にて藤本義一氏講演



男女共生セミナー「山陰夢みなと博覧会視察」



第20回但馬美術展



第30回科学する但馬の子ども作品展  
消費生活巡回教室実施

## 平成10年度

但馬生活創造講座  
県立神戸商科大学特別公開講座開催  
文教府ギャラリー「創作しめ飾り展」開催



文教府青年会議創作活動開催



ボランティアリーダー研修会開催



第33回歴史講演会  
消費生活移動教室開始  
店舗における環境への配慮状況調査実施

## 平成11年度

生活創造大学  
但馬生活創造活動プランナー養成講座開設



文教府青年会議  
くらしのクリエイター研修会開催



但馬生活創造プラザ開設  
くらしの1日教室開催



## 平成12年度

みてやま学園創設30周年記念式典実施



生活創造大学・男女共同参画セミナー開設



文教府青年会議

ユースセミナー「冒険! 青い海とシュノーケル」開催

菌みがき類の公開試買検査会実施

平成11年度消費生活相談件数が500件を突破(570件)

但馬生活科学センターホームページ開設

来訪者用パソコンの設置



## 平成13年度

但馬の子ども絵はがき展開催



ユースセミナー「頭のスポーツ 将棋に挑戦」開催



地域に学ぶトライやる・ウィーク事業の受入れ

但馬生活創造講座開催

インターネット技能講習会開催

環境にやさしい買物運動店頭キャンペーン



IT講習会開催(年5回)



生活創造大学消費生活セミナー開講

## 平成14年度

文教府駐車場整備  
但馬生活創造情報プラザ開設



生活創造応援隊発足  
生活創造しんぶん「T-Dream」創刊  
食の安全・安心相談室開設  
省資源・省エネルギー啓発ポスター巡回展示  
生活創造大学環境セミナー開講

但馬地区消費者団体連絡協議会設立30周年記念  
第30回たじま消費者のつどい特別展開催



ひょうごの「食」安全・安心講座開催  
「食」の安全・安心消費者啓発セミナー開講  
消費者リーダー養成講座開催

第24回ふるさとの心をうたう但馬合唱祭(45団体出場)



## 平成15年度

地域創造市民塾開設



但馬文教府創立40周年・但馬生活科学センター創立35周年  
記念事業開催



## 平成16年度

兵庫県地域高齢者大学地域活動実践講座(2年制)として「但馬文教府みてやま学園大学院」開設



刺し子講座

第37回文教府夏期大学



養老孟司先生



住田裕子先生

宿泊施設利用終了  
兵庫県但馬地域高齢者大学運営委員会設置

## 平成17年度

放送大学「但馬教室」開設  
但馬生活創造情報プラザ改修



県民交流広場事業等のネットワーク化支援事業開始

但馬芸術文化会議チャリティー小品展開設



但馬文化協会創設10周年記念誌発行

## 平成18年度

組織改正により、但馬県民局の内部組織となる  
兵庫県生涯学習講師団派遣事業開始  
地域創造市民塾「但馬ゆうゆう塾」開設



てんこく入門教室

兵庫県地域文化を考えるシンポジウム開催



パネルディスカッション

兵庫県但馬地域高齢者大学運営委員会設置

## 平成19年度

ホームページメイン取得、容量拡大



コミュニティ応援隊事業「但馬ゆうゆう塾」開設



## 平成20年度

学校等との連携事業開始



文教府通信「たじま」発行



近畿大学豊岡短期大学との交流開始

## 平成21年度

兵庫県但馬地域高齢者大学運営委員会設置

但馬文教府みてやま学園創設40周年記念式典実施



但馬生活創造応援隊インフォメーションの開設

但馬文教府みてやま学園創設40周年記念石柱建立



## 平成22年度

近畿大学豊岡短期大学と連携協定締結



第35回但馬文学のつどい



「子育て応援団」創設事業開設



## 平成23年度

公益財団法人兵庫県生きがい創造協会の指定管理施設となる

但馬生活科学センターが「但馬消費生活センター」となり、兵庫県豊岡総合庁舎へ移転

兵庫県但馬地域高齢者大学運営委員会設置

但馬地域交流フェスタ2011実施



但馬芸術文化会議創設15周年記念講演会



## 平成24年度

光回線の一部を利用し、ホームページを運用する

第45回文教府夏期大学



但馬文教府創立50周年イベント事業開催  
(茂山千三郎氏による狂言)



但馬文教府創立50周年記念事業実行委員会設置

## 平成25年度

創立50周年記念式典実施



創立50周年記念式典事業展開

彫像「遙かなる想い」除幕式

記念シンポジウム

特別企画展

特別公開講座

※P70～71 創立50周年記念事業写真掲載

兵庫県地域文化を考えるシンポジウム開催



第35回ふるさとの心をうたう但馬合唱祭











# 但馬文教育職員名簿(昭和38年度から平成25年度まで)

昭和38年度			
府長	白滝	五郎	
次長	原田	春男	
庶務係長	太田	鶴雄	
技術員	田村	誠治	
事業係長	福井	勉	
社会教育主事	足立	貞三	
社会教育主事	鼻戸	勇	

昭和39年度			
府長	白滝	五郎	
次長	原田	春男	
庶務係長	太田	鶴雄	
主事	笠原	義巳	
主事	中村	鉄男	
技術員	田村	誠治	
事業係長	福井	勉	
社会教育主事	足立	貞三	
社会教育主事	鼻戸	勇	
技師	雑賀	みとめ	
技師	中嶋	則子	

昭和40年度			
府長	白滝	五郎	
次長	原田	春男	
庶務係長	太田	鶴雄	
主事	笠原	義巳	
主事	中村	鉄男	
技師	増田	公子	
技術員	田村	誠治	
技術員	浜田	亮	
用務員	谷口	和代	
事業係長	金山	和平	
指導主事	本田	正規	
社会教育主事	足立	貞三	
社会教育主事	鼻戸	勇	
指導主事	太田	久雄	
技師	雑賀	みとめ	
技師	中嶋	則子	

昭和41年度			
府長	白滝	五郎	
次長	原田	春男	
総務課長	太田	鶴雄	
主事	笠原	義巳	
主事	中村	鉄男	
技師	林	公子	
技術員	守本	市郎	
技術員	浜田	亮	
用務員	中井	和代	
事業課長	金山	和平	
指導主事	本田	正規	
社会教育主事	上田喜久雄		
社会教育主事	長谷川利幸		
指導主事	太田	久雄	
技師	中嶋	則子	
技師補	広井	洋子	

昭和42年度			
府長	白滝	五郎	
次長	長谷川誠資		
総務課長	太田	鶴雄	
主事	笠原	義巳	
主事	中村	鉄男	
技師	林	公子	
技術員	守本	市郎	
技術員	浜田	亮	
用務員	中井	和代	
事業課長	本田	正規	
社会教育主事	上田喜久雄		
社会教育主事	平井	重一	
社会教育主事	長谷川利幸		
指導主事	太田	久雄	
技師	橋本	初子	
技師補	広井	洋子	

昭和43年度			
府長	白滝	五郎	
次長	長谷川誠資		
総務課長	太田	鶴雄	
主事	笠原	義巳	
技師	林	公子	
主事補	宮垣	逸良	
技術員	守本	市郎	
技術員	浜田	亮	
見習員	中井	和代	
事業課長	上田喜久雄		
社会教育主事	和田	隆男	
社会教育主事	平井	重一	
社会教育主事	長谷川利幸		
指導主事	太田	久雄	

昭和44年度			
府長	長谷川次長	職務代理	
次長	長谷川誠資		
総務課長	保田	博	
主事	笠原	義巳	
技師	林	公子	
主事補	宮垣	逸良	
技術員	守本	市郎	
技術員	浜田	亮	
見習員	中井	和代	
事業課長	平井	重一	
社会教育主事	徳山	喜重	
社会教育主事	和田	隆男	
社会教育主事	畠	信夫	
指導主事	太田	久雄	

昭和45年度			
府長	喜多村	重光	
総務課長	保田	博	
主任	笠原	義巳	
技師	林	公子	
主事補	宮垣	逸良	
技術員	守本	市郎	
技術員	浜田	亮	
見習員	中井	和代	
事業課長	平井	重一	
指導主事	徳山	喜重	
社会教育主事	和田	隆男	
社会教育主事	畠	信夫	
指導主事	太田	久雄	

昭和46年度			
府長	上田	平雄	
総務課長	大植	崇良	
主任	北村	迪	
主事補	宮垣	逸良	
技術員	守本	市郎	
見習員	中井	和代	
用務員	堀畑	五雄	
事業課長	安東	常夫	
社会教育主事	大西	隆夫	
指導主事	田中	萬年	
指導主事	徳山	喜重	
社会教育主事	和田	隆男	
社会教育主事	畠	信夫	

昭和47年度			
府長	上田	平雄	
総務課長	大植	崇良	
主任	北村	迪	
主事	横田	一	
技術員	守本	市郎	
事務員	中井	和代	
事務員	堀畑	五雄	
事業課長	安東	常夫	
社会教育主事	大西	隆夫	
指導主事	田中	萬年	
指導主事	徳山	喜重	
社会教育主事	畠	信夫	
指導主事	太田垣惣次		

昭和48年度			
府長	上田	平雄	
総務課長	大植	崇良	
主任	北村	迪	
主任	横田	一	
技術員	守本	市郎	
技術員	堀畑	五雄	
事務員	中井	和代	
事業課長	徳山	喜重	
指導主事	浅井	威	
指導主事	太田垣惣次		
指導主事	澤田	道夫	
主任	西脇	幸雄	
指導主事	西谷	豊	

昭和49年度			
府長	上田	平雄	
次長兼総務課長	大植	崇良	
主任	横田	一	
主任	柳原	正伸	
技術員	守本	市郎	
技術員	堀畑	五雄	
事務員	中井	和代	
事業課長	徳山	喜重	
指導主事	浅井	威	
指導主事	太田垣惣次		
指導主事	澤田	道夫	
社会教育主事	西脇	幸雄	
指導主事	西谷	豊	

昭和50年度			
府長	細見	浩	
次長兼総務課長	大植	崇良	
府長補佐兼 事業課長	明石	正信	
主任	横田	一	
主任	柳原	正伸	
技術職員	守本	市郎	
技術員	堀畑	五雄	
事務員	中井	和代	
社会教育主事	森	功	
社会教育主事	西脇	幸雄	
社会教育主事	世木	貞夫	
指導主事	澤田	道夫	
指導主事	西谷	豊	

昭和51年度			
府長	細見	浩	
次長兼総務課長	大植	崇良	
府長補佐兼 事業課長	明石	正信	
主任	横田	一	
主任	柳原	正伸	
技術職員	守本	市郎	
技術員	堀畑	五雄	
事務員	中井	和代	
主任指導主事	澤田	道夫	
社会教育主事	森	功	
社会教育主事	西脇	幸雄	
社会教育主事	世木	貞夫	
指導主事	西谷	豊	
指導主事	堂垣	正一	
指導主事	福井	幸一	
指導主事	河関	清蔵	
指導主事	津田	芳雄	

昭和52年度			
府長	林	五和夫	
次長兼総務課長	太田	鶴雄	
府長兼事業課長	今後	真一	
主任	横田	一	
主任	柳原	正伸	
技術職員	守本	市郎	
技術員	堀畑	五雄	
事務員	中井	和代	
主任社会教育主事	森	功	
社会教育主事	西脇	幸雄	
社会教育主事	世木	貞夫	
指導主事	水嶋	元	
指導主事	西谷	豊	
指導主事	堂垣	正一	
指導主事	福井	幸一	
指導主事	河関	清蔵	
指導主事	津田	芳雄	

昭和53年度	
府長	小島 正男
次長兼総務課長	太田 鶴雄
次長兼事業課長	今後 真一
主査	柳原 正伸
主査	上坂 孝利
技術職員	守本 市郎
事務員	中井 和代
技術員	堀畑 五雄
主任社会教育主事	森 功
主任社会教育主事	西脇 幸雄
社会教育主事	世木 貞夫
指導主事	水嶋 元
指導主事	西谷 豊
庁舎管理事務員	堂垣 正一
庁舎管理事務員	福井 幸一
庁舎管理事務員	津田 芳雄

昭和54年度	
府長	小島 正男
次長兼総務課長	鈴木 利夫
次長兼事業課長	和田 隆男
所長補佐	森 功
所長補佐	水嶋 元
主査	柳原 正伸
事務吏員	上坂 孝利
技術吏員	守本 市郎
事務員	中井 和代
技術員	堀畑 五雄
課長補佐	世木 貞夫
課長補佐	中村 勝
課長補佐	福井 惟士
庁舎管理事務員	堂垣 正一
庁舎管理事務員	福井 幸一
庁舎管理事務員	津田 芳雄
庁舎管理事務員	津田 松造

昭和55年度	
府長	内橋 昭
次長兼総務課長	鈴木 利夫
次長兼事業課長	和田 隆男
所長補佐	森 功
所長補佐	水嶋 元
課長補佐	柳原 正伸
事務吏員	上坂 孝利
技術吏員	守本 市郎
事務員	中井 和代
技術員	堀畑 五雄
課長補佐	藤原 薫
課長補佐	中村 勝
課長補佐	福井 惟士
庁舎管理事務員	津田 芳雄
庁舎管理事務員	津田 松造
庁舎管理事務員	坂田 誠一
庁舎管理事務員	石原 義一

昭和56年度	
府長	内橋 昭
次長兼総務課長	鈴木 利夫
次長兼事業課長	和田 隆男
所長補佐	水嶋 元
所長補佐	藤原 薫
所長補佐	中村 勝
主査	赤坂與志夫
主任	岡本 和幸
技術吏員	守本 市郎
事務員	中井 和代
技術員	堀畑 五雄
主査	鈴木 馨
主査	山下喜久男
庁舎管理事務員	津田 芳雄
庁舎管理事務員	津田 松造
庁舎管理事務員	石原 義一

昭和57年度	
府長	鼻戸 勇
次長兼総務課長	横川 秀人
次長兼事業課長	和田 隆男
所長補佐	藤原 薫
所長補佐	中村 勝
所長補佐	小谷 博
主査	赤坂與志夫
事務吏員	西角 光司
技術吏員	守本 市郎
事務員	中井 和代
技術員	堀畑 五雄
課長補佐	鈴木 馨
主査	山下喜久男
庁舎管理事務員	津田 芳雄
庁舎管理事務員	津田 松造
庁舎管理事務員	福井 重次

昭和58年度	
府長	鼻戸 勇
次長兼総務課長	横川 秀人
次長兼事業課長	中村 勝
所長補佐	中西 又夫
所長補佐	小谷 博
課長補佐	赤坂與志夫
事務吏員	西角 光司
技術吏員	守本 市郎
事務員	中井 和代
技術員	堀畑 五雄
課長補佐	竹内 宗正
主査	米田 啓祐
文化活動指導員	朝日 眞
文化活動指導員	木村 彦一
文化活動指導員	津田 芳雄
文化活動指導員	津田 松造
文化活動指導員	福井 重次

昭和59年度	
府長	鼻戸 勇
次長	品川 正法
次長	中村 勝
所長補佐	中西 又夫
所長補佐	小谷 博
所長補佐	竹内 宗正
課長補佐	赤坂與志夫
主査	米田 啓祐
事務吏員	西角 光司
技術吏員	守本 市郎
事務員	中井 和代
技術員	堀畑 五雄
文化活動指導員	朝日 眞
文化活動指導員	木村 彦一
文化活動指導員	津田 芳雄
文化活動指導員	福井 重次
文化活動指導員	堂垣 修

昭和60年度	
府長	和田 隆男
次長	品川 正法
次長	小谷 博
所長補佐	金谷 毅元
課長補佐	米田 啓祐
主査	朝倉 征夫
主査	上田 彬雄
主任	河本みち子
主任	小椋 光雄
技術吏員	堀畑 五雄
事務員	中井 和代
技術員	木内 雅大
文化活動指導員	朝日 眞
文化活動指導員	木村 彦一
文化活動指導員	福井 重次
文化活動指導員	堂垣 修
文化活動指導員	竹中 美義
文化活動指導員	守本 市郎

昭和61年度	
府長	和田 隆男
次長	造作 修
次長	井上 倍行
主任文化専門員	金谷 毅元
主任文化専門員	足立 禪英
文化専門員	朝倉 征夫
文化専門員	上田 彬雄
主査	小椋 光雄
主任	河本みち子
技術吏員	堀畑 五雄
事務員	中井 和代
技術員	木内 雅大
文化活動指導員	朝日 眞
文化活動指導員	木村 彦一
文化活動指導員	福井 重次
文化活動指導員	堂垣 修
文化活動指導員	坂井 義一

昭和62年度	
府長	和田 隆男
次長	造作 修
次長	井上 倍行
主任文化専門員	下田 暢夫
主任文化専門員	朝倉 征夫
文化専門員	糸谷 誠幸
文化専門員	上田 彬雄
主査	河本みち子
主任	小椋 光雄
技術吏員	堀畑 五雄
事務員	中井 和代
技術員	木内 雅大
文化活動指導員	國谷 優
文化活動指導員	畑山 英夫
文化活動指導員	福井 重次
文化活動指導員	堂垣 修
文化活動指導員	坂井 義一

昭和63年度	
府長	世木 貞夫
次長	田中 啓介
次長	西谷 豊
主任文化専門員	下田 暢夫
主任文化専門員	朝倉 征夫
文化専門員	糸谷 誠幸
文化専門員	松田 茂男
主査	河本みち子
主査	小椋 光雄
技術吏員	堀畑 五雄
事務員	中井 和代
技術員	木内 雅大
文化活動指導員	國谷 優
文化活動指導員	畑山 英夫
文化活動指導員	福井 重次
文化活動指導員	堂垣 修
文化活動指導員	坂井 義一

平成元年度	
府長	高石 信
次長	田中 啓介
次長	西谷 豊
主任文化専門員	下田 暢夫
主任文化専門員	朝倉 征夫
主任文化専門員	糸谷 誠幸
文化専門員	松田 茂男
主査	河本みち子
主任	吉本 和夫
技術吏員	堀畑 五雄
事務員	中井 和代
技術員	木内 雅大
文化活動指導員	國谷 優
文化活動指導員	畑山 英夫
文化活動指導員	福井 重次
文化活動指導員	堂垣 修
文化活動指導員	坂井 義一

平成2年度	
府長	高石 信
次長	藤本 幹俊
次長	朝倉 征夫
主任文化専門員	清水 忠
主任文化専門員	岩村 年隆
文化専門員	松田 茂男
文化専門員	山村 俊雄
主任	吉本 和夫
事務吏員	谷口みゆき
技術吏員	堀畑 五雄
技術吏員	木内 雅大
事務員	中井 和代
文化活動指導員	國谷 優
文化活動指導員	畑山 英夫
文化活動指導員	溝尻 幸平
文化活動指導員	福本 義朗
文化活動指導員	植田 英

平成3年度	
府長	高石 信
次長	藤本 幹俊
次長	清水 忠
主任文化専門員	尾畑 鉄男
主任文化専門員	岩村 年隆
文化専門員	山村 俊雄
文化専門員	松田 茂男
主査	吉本 和夫
事務吏員	谷口みゆき
技術吏員	堀畑 五雄
技術吏員	木内 雅大
事務員	中井 和代
文化活動指導員	國谷 優
文化活動指導員	菅村 勇
文化活動指導員	溝尻 幸平
文化活動指導員	植田 英
文化活動指導員	竹川 一美

平成4年度	
府長	足立 勝美
次長	藤田 博
次長	清水 忠
主任文化専門員	尾畑 鉄男
主任文化専門員	岩村 年隆
主任文化専門員	山村 俊雄
主任文化専門員	北本 重安
主査	吉本 和夫
事務吏員	谷口みゆき
技術吏員	堀畑 五雄
技術吏員	木内 雅大
事務員	中井 和代
文化活動指導員	乳原 厚彦
文化活動指導員	岡本 邦弘
文化活動指導員	溝尻 幸平
文化活動指導員	植田 英
文化活動指導員	竹川 一美

平成5年度	
府長	足立 勝美
副館長	藤田 博
副館長	岩村 年隆
主任文化専門員	山村 俊雄
文化専門員	田中 實雄
文化専門員	北本 重安
文化専門員	土野 信義
主 査	秋山 一也
事務吏員	谷口みゆき
技術吏員	堀畑 五雄
技術吏員	木内 雅大
事務員	中井 和代
文化活動指導員	乳原 厚彦
文化活動指導員	岡本 邦弘
事務管理員	溝尻 幸平
事務管理員	植田 英
事務管理員	竹川 一美

平成6年度	
府長	林 美嗣
副館長	和田 英暉
副館長	岩村 年隆
主任文化専門員	山村 俊雄
文化専門員	田中 實雄
文化専門員	北本 重安
文化専門員	土野 信義
主 査	秋山 一也
事務吏員	谷口みゆき
技術吏員	堀畑 五雄
技術吏員	木内 雅大
事務員	中井 和代
文化活動指導員	乳原 厚彦
文化活動指導員	岡本 邦弘
事務管理員	溝尻 幸平
事務管理員	植田 英
事務管理員	竹川 一美

平成7年度	
府長	林 美嗣
副館長	和田 英暉
副館長	山村 俊雄
主任文化専門員	田中 實雄
文化専門員	尾崎 靖宏
文化専門員	北本 重安
文化専門員	土野 信義
主 査	秋山 一也
事務吏員	森田 有子
技術吏員	堀畑 五雄
技術吏員	木内 雅大
事務員	中井 和代
文化活動指導員	乳原 厚彦
文化活動指導員	岡本 邦弘
事務管理員	溝尻 幸平
事務管理員	植田 英
事務管理員	竹川 一美

平成8年度	
府長	池口 壽彦
副館長	藤本 均
副館長	山村 俊雄
主任文化専門員	田中 實雄
文化専門員	尾崎 靖宏
文化専門員	山崎 裕
文化専門員	井上 正弘
主 査	秋山 一也
事務吏員	森田 有子
技術吏員	木内 雅大
事務員	中井 和代
技術員	中西 志延
文化活動指導員	岡本 邦弘
文化活動指導員	小川 恭志郎
事務管理員	今西 博
事務管理員	関 壽一
事務管理員	竹川 一美

平成9年度	
府長	池口 壽彦
副館長	藤本 均
副館長	藤原 嘉信
主任文化専門員	中村 道明
文化専門員	尾崎 靖宏
文化専門員	山崎 裕
文化専門員	井上 正弘
主 査	山崎 孝弘
事務吏員	森田 有子
技術吏員	木内 雅大
事務員	中井 和代
技術員	中西 志延
文化活動指導員	小川 恭志郎
文化活動指導員	山本 康弘
事務管理員	今西 博
事務管理員	関 壽一
事務管理員	竹川 一美

平成10年度	
府長	延藤 十九雄
副館長	蘆田 博明
副館長	藤原 嘉信
主任文化専門員	中村 道明
文化専門員	高橋 正透
文化専門員	木村 一祥
文化専門員	井上 正弘
主 査	山崎 孝弘
事務吏員	森田 有子
技術吏員	木内 雅大
事務員	中井 和代
技術員	中西 志延
文化活動指導員	小川 恭志郎
文化活動指導員	山本 康弘
事務管理員	今西 博
事務管理員	関 壽一
事務管理員	竹川 一美

平成11年度	
府長	延藤 十九雄
副館長	蘆田 博明
副館長	中村 道明
主任文化専門員	足立 篤史
文化専門員	高橋 正透
文化専門員	木村 一祥
文化専門員	坪内 久貴
主 査	山崎 孝弘
事務吏員	森田 有子
技術吏員	木内 雅大
事務員	中井 和代
技術員	中西 志延
文化活動指導員	小川 恭志郎
文化活動指導員	山本 康弘
事務管理員	今西 博
事務管理員	関 壽一
事務管理員	中井 一好

平成12年度	
府長	上中 一雄
副館長	蘆田 博明
副館長	中村 道明
主任文化専門員	足立 篤史
文化専門員	木村 一祥
文化専門員	坪内 久貴
文化専門員	中川 光之
主 任	吉本 宏治
主 任	森田 有子
技術吏員	木内 雅大
事務員	中井 和代
技術員	中西 志延
文化活動指導員	朝倉 征夫
文化活動指導員	前田 清美
事務管理員	関 壽一
事務管理員	中井 一好
事務管理員	藤井 武

平成13年度	
府長	上中 一雄
主幹(総務担当)	田中 重海
課長補佐	片山 美子
主 査	吉本 宏治
技術吏員	木内 雅大
事務員	中井 和代
技術員	中西 志延
主幹(事業担当)	野上 英明
主任文化専門員	足立 篤史
文化専門員	木村 一祥
文化専門員	坪内 久貴
文化専門員	中川 光之
文化活動指導員	朝倉 征夫
文化活動指導員	前田 清美
事務管理員	中井 一好
事務管理員	藤井 武
事務管理員	今井 勝

平成14年度	
府長	久下 隆史
主幹(総務担当)	田中 重海
課長補佐	片山 美子
主 査	吉本 宏治
技術吏員	木内 雅大
事務員	中井 和代
主幹(事業担当)	野上 英明
主任文化専門員	足立 篤史
文化専門員	坪内 久貴
文化専門員	垣尾 幸博
文化専門員	中川 光之
文化活動指導員	朝倉 征夫
文化活動指導員	前田 清美
生活創造活動コーディネーター	三笠知加野
事務管理員	中井 一好
事務管理員	藤井 武
事務管理員	今井 勝

平成15年度	
府長	久下 隆史
主幹(総務担当)	松井 昇
課長補佐	片山 美子
主 査	吉本 宏治
技術吏員	木内 雅大
事務員	中井 和代
主幹(事業担当)	足立 篤史
主任文化専門員	坪内 久貴
文化専門員	垣尾 幸博
文化専門員	中川 光之
文化専門員	西村 和夫
事務嘱託員	中井 和代
文化活動指導員	朝倉 征夫
文化活動指導員	前田 清美
文化活動指導員	垣谷 正詔
生活創造活動コーディネーター	三笠知加野
事務管理員	中井 一好
事務管理員	藤井 武
事務管理員	荒田 光男

平成16年度	
府長	梶田 一文
主幹(総務担当)	松井 昇
課長補佐	石塚 弘美
主 査	吉本 宏治
技術吏員	木内 雅大
主幹(事業担当)	足立 篤史
主任文化専門員	坪内 久貴
主任文化専門員	垣尾 幸博
文化専門員	西村 和夫
文化専門員	鈴木 文孝
事務嘱託員	中井 和代
文化活動指導員	岩村 年隆
文化活動指導員	前田 清美
生活創造活動コーディネーター	三笠知加野
事務管理員	中井 一好
事務管理員	藤井 武
事務管理員	荒田 光男

平成17年度	
府長	梶田 一文
主幹(総務担当)	青山 哲雄
課長補佐	石塚 弘美
事務吏員	國眼 真一
技術吏員	木内 雅大
主幹(事業担当)	尾崎 武彦
生活創造活動専門員	中瀬 圭一
主任文化専門員	坪内 久貴
文化専門員	段畑 哲也
文化専門員	鈴木 文孝
文化活動指導員	岩村 年隆
生活創造活動コーディネーター	三笠知加野
事務管理員	梅林 耕一
事務管理員	井上 清
事務管理員	荒田 光男
日々雇用職員	皆木 浩子

平成18年度	
府長	松田 義人
主幹(総務担当)	青山 哲雄
担当課長補佐	石塚 弘美
事務吏員	國眼 真一
技術吏員	木内 雅大
主幹(事業担当)	尾崎 武彦
生活創造活動専門員	中瀬 圭一
主任文化専門員	段畑 哲也
文化専門員	鈴木 文孝
文化専門員	中井 宏
文化活動指導員	岩村 年隆
生活創造活動コーディネーター	三笠知加野
事務管理員	梅林 耕一
事務管理員	井上 清
事務管理員	荒田 光男
日々雇用職員	田中 祥子

平成19年度	
府長	松田 義人
副館長	西村 嘉浩
主 任	米田 庄
事務吏員	國眼 真一
主任技師	木内 雅大
主幹(事業担当)	福本 千歳
生活創造活動専門員	中瀬 圭一
文化専門員	藤原 強
文化専門員	鈴木 文孝
文化専門員	中井 宏
文化活動指導員	岩村 年隆
生活創造活動コーディネーター	三笠知加野
事務管理員	梅林 耕一
事務管理員	井上 清
事務管理員	荒田 光男
日々雇用職員	鈴木 祐子

平成20年度	
府 長	石井 稔
副 館 長	西村 嘉浩
主 査	鳥井ゆかり
主 査	米田 庄
主任技師	木内 雅大
主幹(事業担当)	段畑 哲也
生活創造 活動専門員	中瀬 圭一
主任文化専門員	田中 篤幸
文化専門員	中井 宏
文化専門員	戸田 康夫
文化活動指導員	今西 俊継
生活創造活動 コーディネーター	山根 克己
庁舎管理事務員	荒田 光男
庁舎管理事務員	戸田 悦造
庁舎管理事務員	赤木 秀規
日々雇用職員	鈴木 祐子

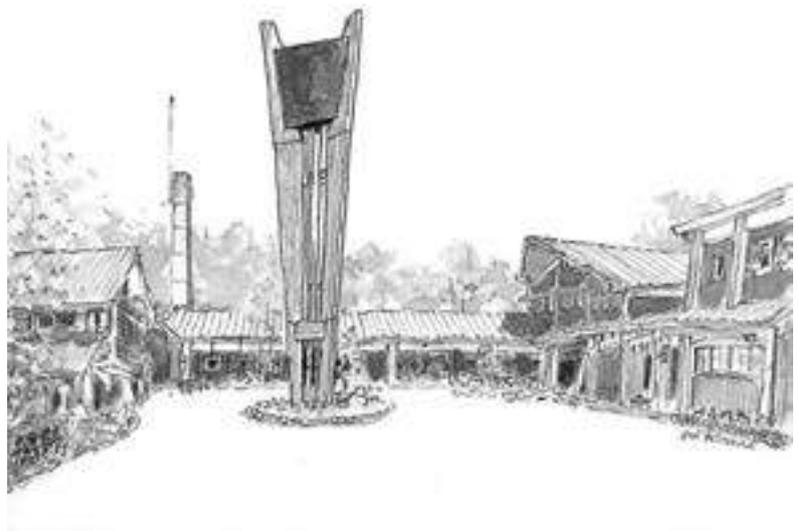
平成21年度	
府 長	石井 稔
副 館 長	濱田 直義
主 査	鳥井ゆかり
主 査	米田 庄
主任技師	木内 雅大
主幹兼事業課長	段畑 哲也
主任文化専門員	田中 篤幸
文化専門員	中井 宏
文化専門員	戸田 康夫
生活創造 活動専門員	楠田 千晴
文化活動指導員	今西 俊継
生活創造活動 コーディネーター	山根 克己
庁舎管理事務員	荒田 光男
庁舎管理事務員	戸田 悦造
庁舎管理事務員	赤木 秀規
日々雇用職員	塚本 裕子

平成22年度	
府 長	加古 博志
副 館 長	濱田 直義
主 査	鳥井ゆかり
主 査	岸田 智子
主任技師	木内 雅大
主幹兼事業課長	段畑 哲也
生活創造 活動専門員	楠田 千晴
文化専門員	御栗 康嗣
文化専門員	戸田 康夫
文化専門員	岩浅克友希
文化活動指導員	尾崎 靖宏
生活創造活動 コーディネーター	山根 克己
庁舎管理事務員	荒田 光男
庁舎管理事務員	戸田 悦造
庁舎管理事務員	赤木 秀規
日々雇用職員	塚本 裕子

平成23年度	
府 長	川上 教朗
副 館 長	定元 孝文
課長補佐	鳥井ゆかり
課長補佐	岸田 智子
主任技師	木内 雅大
主幹兼事業課長	藤原 尚
主任生活創造 活動専門員	楠田 千晴
主任文化専門員	磯田 英昭
文化専門員	御栗 康嗣
文化専門員	岩浅克友希
文化活動指導員	尾崎 靖宏
生活創造活動 コーディネーター	松永早奈絵
庁舎管理事務員	荒田 光男
庁舎管理事務員	戸田 悦造
庁舎管理事務員	赤木 秀規
日々雇用職員	塚本 裕子

平成24年度	
府 長	川上 教朗
副 館 長	定元 孝文
課長補佐	岸田 智子
主任技師	木内 雅大
主幹兼事業課長	藤原 尚
主任文化専門員	御栗 康嗣
主任文化専門員	磯田 英昭
文化専門員	岩浅克友希
生活創造 活動専門員	福田 秀則
文化活動指導員	上田 順子
生活創造活動 コーディネーター	松永早奈絵
庁舎管理事務員	荒田 光男
庁舎管理事務員	戸田 悦造
庁舎管理事務員	赤木 秀規
日々雇用職員	塚本 裕子

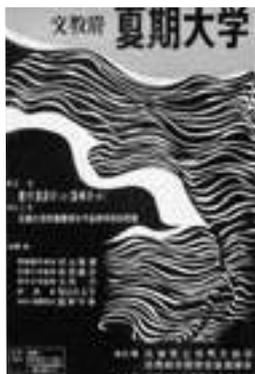
平成25年度	
府 長	川上 教朗
副 館 長	定元 孝文
課長補佐	岸田 智子
主任技師	木内 雅大
主幹兼事業課長	藤原 尚
文化専門員	岩浅克友希
文化専門員	丹後谷 智
生活創造 活動専門員	福田 秀則
文化専門員	栗林 伸知
文化活動指導員	上田 順子
庁舎管理事務員	戸田 悦造
庁舎管理事務員	赤木 秀規
庁舎管理事務員	篠木 鉄夫
日々雇用職員	塚本 裕子



# 文教府夏期大学の軌跡



**第1回 昭和43年8月24日～25日**  
**県立豊岡高校和魂ホール**  
 「教育革新時代」  
 津田塾大学教授 伊藤 昇  
 「但馬の風土など」  
 作家 司馬遼太郎  
 「文化について」  
 評論家 犬養 道子  
 「これからの日本経済」  
 横浜国立大学教授 長州 一二  
 「変動する世界の中の日本」  
 京都大学助教授 高坂 正堯  
 あいさつ  
 但馬文教府顧問・元兵庫県知事 阪本 勝



**第2回 昭和44年8月23日～24日**  
**近畿大学附属豊岡女子高校体育館**  
 「南極と極点旅行」  
 南極観測越冬隊長 村山 雅美  
 「私たちにとって生きがいとは何か」  
 京都大学教授 会田 雄次  
 「日本経済と農業地域の将来」  
 東京大学教授 大内 力  
 「この頃思うこと」  
 評論家 秋山ちえ子  
 「転換する国際情勢と日本」  
 NHK考査室長 館野 守男



**第3回 昭和45年8月22日～23日**  
**近畿大学附属豊岡女子高校体育館**  
 「現代と家庭と福祉」  
 日本女子大学教授 一番ヶ瀬康子  
 「自分が守らなければ誰も守ってくれない」  
 医事評論家 石垣 純二  
 「1970年代の日本の課題」  
 評論家・未来学者 坂本 二郎  
 「アポロ以後の宇宙計画」  
 NHK解説副委員長 村野 賢哉  
 「国際社会における日本の役割」  
 関西学院大学助教授 小川 芳彦



**第4回 昭和46年10月23日～24日**  
**豊岡市民会館文化ホール**  
 「脱西欧文明と日本文化の再建」  
 千葉大学教授 清水馨八郎  
 「家庭の未来」  
 評論家 俵 萌子  
 「歴史と人生」  
 東京大学教授 林 健太郎  
 「科学と人間の福祉」  
 一橋大学教授 都留 重人  
 「自然(保護)とはどういうことか」  
 京都大学助教授 川那部浩哉

**第5回 昭和47年8月26日～27日**  
**豊岡市民会館文化ホール**  
 「小説と人生」

作家 田辺 聖子  
 「情報化社会と人間」  
 東京工業大学教授 林 雄二郎  
 「公害・安全性・人権」  
 物理学者 武谷 三男  
 「自由のきびしさ」  
 ノートルダム清心女子大学長 渡辺 和子  
 「文学のおもしろさ」  
 文芸評論家法政大学教授 小田切秀雄



**第6回 昭和48年8月25日～26日**  
**豊岡市民会館文化ホール**  
 「歴史と神話」  
 京大文学部人文科学研究所教授 上山 春平  
 「公害時代の健康法」  
 お茶の水クリニック院長 森下 敬一  
 「円問題と国民生活」  
 横浜国立大学教授 宮崎 義一  
 「事実と真実」  
 作家 曾野 綾子  
 「わたしの文学のふるさと」  
 作家(郷土出身) 藤井 重夫

**第7回 昭和49年8月24日～25日**  
**豊岡市民会館文化ホール**  
 「ストレスと健康長寿」  
 東京教育大学名誉教授 杉 靖三郎  
 「教育の根本問題は何か」  
 朝日新聞社論説委員 永井 道雄  
 「世相と経済」  
 法政大学教授 伊藤 光晴  
 「それぞれの道—日本と中国—」  
 作家 陳 舜臣  
 「ほんものにもせもの—かしい生活者の条件—」  
 商品科学研究所長前婦人公論編集長  
 三枝佐枝子



**第8回 昭和50年8月23日～24日**  
**豊岡市民会館文化ホール**  
 「世界と日本」  
 NHK解説委員 平沢 和重  
 「現代青年を考える—不安から参加へ—」  
 京都大学助教授 松原 治郎  
 「日本文化の考え方」  
 京都大学助教授 多田道太郎  
 「ゆとりとユーモア」  
 作家 阿川 弘之  
 「現代社会と女性—国際婦人年によせて—」  
 評論家 樋口 恵子



第9回 昭和51年8月22日  
豊岡市民会館文化ホール

「日本の進路を考える  
—現代の変化を考える—」  
評論家 草柳 大蔵  
「女たちの支えた歴史」  
作家 永井 路子  
「世界の潮流」  
NHK解説委員長 緒方 彰



第10回 昭和52年8月21日  
豊岡市民会館文化ホール

「挑む」  
芸術家 岡本 太郎  
「日仏文化の交流」  
評論家 河盛 好蔵  
「暮らしの中の忘れもの」  
評論家 五代利矢子



第11回 昭和53年8月20日  
豊岡市民会館文化ホール

「人生雑感」  
俳優 森繁 久彌  
「真の豊かさとは」  
評論家 高原須美子  
「数学的なものの見方」  
数学者 広中 平祐



第12回 昭和54年8月19日  
豊岡市民会館文化ホール

「日本人の可能性  
—その風土性にもとづいて—」  
国学院大学名誉教授 樋口 清之  
「伊作とその娘たち」  
評論家 上坂 冬子  
「世界と日本  
—ニュースの裏側からの見方—」  
NHK記者 勝部 領樹



第13回 昭和55年8月24日  
豊岡市民会館文化ホール

「国際情勢の見方」  
NHK解説委員長 山室 英男  
「女性の生き方—その可能性を  
めぐって—」  
慶応義塾大学教授 岩男寿美子  
「人間の心理と生きがい」  
評論家 加藤 諦三



第14回 昭和56年8月23日  
豊岡市民会館文化ホール

「日本の学校教育—その問題—」  
東京大学教授 西 義之  
「感性の時代」  
千葉工業大学教授 木村 治美  
「おいしさと健康」  
料理研究家 土井 勝



第15回 昭和57年8月29日  
豊岡市民会館文化ホール

「ドラマの中の女たち」  
作家 橋田寿賀子  
「現代日本人の精神的課題」  
慶応義塾大学教授 小此木啓吾  
「国際化時代の日本の進路」  
国際大学副学長 宍戸 寿雄



第16回 昭和58年8月28日  
豊岡市民会館文化ホール

「ヒトと自然」  
作家 加藤 幸子  
「人間通の時代」  
関西大学教授 谷沢 永一  
「政治の現状と課題」  
NHK解説委員 岡村 和夫



第17回 昭和59年8月19日  
豊岡市民会館文化ホール

「教育の忘れもの」  
評論家 川上源太郎  
「『集団人間』から『自分人間』へ」  
評論家 犬養 智子  
「世界の動きと日本」  
NHK記者 小浜 維人



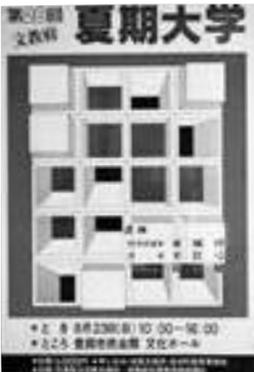
第18回 昭和60年8月18日  
豊岡市民会館文化ホール

「一病息災の健康学」  
医事評論家 水野 肇  
「明日はわが身」  
作家 笹沢 佐保



第19回 昭和61年8月17日  
豊岡市民会館文化ホール

「暮らしと気象」  
NHK気象キャスター 倉嶋 厚  
「言葉と日本人」  
評論家 森本 哲郎



第20回 昭和62年8月23日  
豊岡市民会館文化ホール

「転機に立つ日本」  
時事評論家 家城啓一郎  
「わたしの取材ノートより」  
作家 平岩 弓枝  
「暮らしの再発見」  
NHKアナウンサー 鈴木 健二



第21回 昭和63年8月21日  
豊岡市民会館文化ホール

「小説のなかの女たち」  
作家 宮尾登美子  
「耕す文化の時代  
—これからの生き方を考える—」  
東京大学教授 木村尚三郎



第22回 平成元年8月20日  
豊岡市民会館文化ホール

「絵のある履歴書」  
版画家・作家 池田満寿夫  
「苦難時代の人生を生きる」  
作家 黒岩 重吾



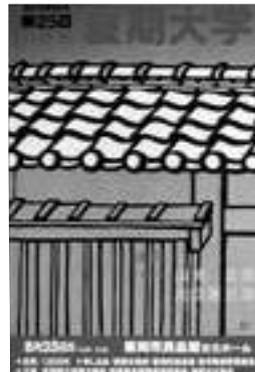
第23回 平成2年8月19日  
豊岡市民会館文化ホール

「私の生き方  
—充実して生きるために—」  
作家 戸川 昌子  
「生きがいと生涯学習」  
お茶の水女子大学学長 河野 重男



第24回 平成3年8月18日  
豊岡市民会館文化ホール

「こころの風景」  
作家 五木 寛之  
「転機に立つ日本」  
NHK解説委員 前田 一郎



第25回 平成4年8月23日  
豊岡市民会館文化ホール

「世界の中の日本文化」  
大阪大学教授 山崎 正和  
「生きていく上での言葉」  
作家 大江健三郎



第26回 平成5年8月22日  
豊岡市民会館文化ホール

「地球市民として生きる」  
作家 小松 左京  
「内外から見た日本と  
果たすべき役割」  
上智大学教授 グレゴリー・クラーク



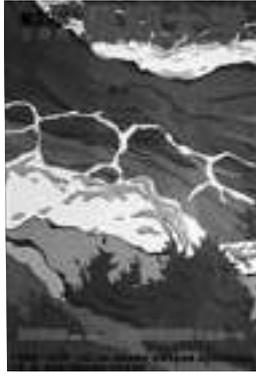
第27回 平成6年8月21日  
豊岡市民会館文化ホール

「21世紀の科学と文化」  
ノーベル化学賞受賞者 基礎化学研究所 所長 福井 謙一  
「少数連立政権のゆくえ」  
政治評論家 東海大学教授 内田 健三



第28回 平成7年8月20日  
豊岡市民会館文化ホール

「国際社会と日本」  
NHK解説主幹 平野 次郎  
「戦後50年を想う」  
前文部大臣 赤松 良子



第29回 平成8年8月18日  
豊岡市民会館文化ホール

「日本の危機・未来を読む」  
東北大学総長 西澤 潤一  
「いのちの重さ」  
作家 神坂 次郎



第30回 平成9年8月31日  
豊岡市民会館文化ホール

「画業70年を通して思うこと  
—裸婦の作品と日本人—」  
画家 伊藤 清永  
「人間を考える」  
作家 藤本 義一



第31回 平成10年8月30日  
豊岡市民会館文化ホール

「人生は火のように水のように」  
作家 桐島 洋子  
「我国をとりまく国際情勢」  
国際政治学者 浅井 信雄



第32回 平成11年8月22日  
豊岡市民会館文化ホール

「創るということ」  
作曲家・随筆家 團 伊玖磨  
「新しい生活の妙薬をお譲りします」  
弁護士 三瀬 顯



第33回 平成12年8月20日  
豊岡市民会館文化ホール

「金八先生から世界へ」  
シナリオライター 小山内美江子  
「人生お天気模様  
—くらしに役立つ天気の話—」  
気象評論家 福井 敏雄



第34回 平成13年8月19日  
豊岡市民会館文化ホール

「人間的魅力について」  
作家 城山 三郎  
「森の惑星—森の循環と人の再生—」  
工芸家(オークヴァレッジ代表) 稲本 正



第35回 平成14年8月31日  
豊岡市民会館文化ホール

「まちくらし・すまい  
~安心して暮らせるすまいづくり~」  
エッセイスト 見城美枝子  
「豊かな生、豊かな死のために」  
ノンフィクション作家 柳田 邦男



第36回 平成15年8月30日  
豊岡市民会館文化ホール

「日本はこれからどうなる」  
評論家 立花 隆  
「顔と心と体について」  
フェイシャルセラピスト かづきれいこ



第37回 平成16年8月28日  
豊岡市民会館文化ホール

「からだを読む」  
東京大学名誉教授 養老 孟司  
「行列のできる法律相談の窓口から」  
弁護士 住田 裕子



第38回 平成17年8月20日  
豊岡市民会館文化ホール

「地震を知って震災に備える」  
京都大学総長 尾池 和夫  
「愛があるなら叱りなさい」  
アテネオリンピックシンクロナイズドスイミング日本代表ヘッドコーチ  
井村 雅代



第39回 平成18年8月26日  
豊岡市民会館文化ホール

「“生きている”を見つめ  
“生きる”を考える」  
生命誌研究者 JT生命誌研究館館長  
中村 桂子  
「生きる・働く・暮らす」  
経済評論家 内橋 克人



第40回 平成19年8月18日  
豊岡市民会館文化ホール

「宇宙はどこまでわかっているか」  
天文学者・宇宙物理学者 池内 了  
「混迷の現代社会を想う」  
ジャーナリスト 江川 紹子



第41回 平成20年8月23日  
豊岡市民会館文化ホール

「『さらむの里』からのメッセージ  
—日本人はイスラームとどうつきあうか—」  
国際日本文化研究センター名誉教授・前所長  
片倉 もとこ  
「心も体も健康、希望高く生きよう」  
キャスター 生島ヒロシ



第42回 平成21年8月22日  
豊岡市民会館文化ホール

「禅的な生き方」  
芥川賞作家 臨済宗妙心寺派福聚寺住職  
玄侑 宗久  
「家庭の品格」  
昭和女子大学学長 坂東真理子



第43回 平成22年8月21日  
豊岡市民会館文化ホール

「万葉ロマン  
～恋のかたちと日本人の心～」  
マンガ家 大阪芸術大学教授  
里中満智子  
「楽しい読書、すてきな日本語」  
作家 日本ペンクラブ会長 阿刀田 高



第44回 平成23年8月20日  
豊岡市民会館文化ホール

「激動する世界から  
日本の進路を考える」  
ジャーナリスト 田原総一郎  
「いま子どもたちのために、  
大人ができること  
—精神科医の視点から—」  
精神科医 立教大学教授 香山 リカ



第45回 平成24年8月18日  
豊岡市民会館文化ホール

「日本語面白教室」  
日本語学者 杏林大学教授 金田一秀穂  
「受け渡したい日本のこころ  
—文化の力がはぐくむもの—」  
小説家 玉岡かおる



第46回 平成25年8月24日  
豊岡市民会館文化ホール

「目的のある人生観」  
薬師寺管主 山田 法胤  
「音楽をとおして豊かに生きる」  
音楽評論家 作詞家 湯川れい子



# 但馬文教府の いま



# 但馬文教府の施設

但馬文教府では、人数や目的に合わせて会議室や講堂兼体育室などが利用できます。また、但馬に関する図書を貸出、閲覧ができる但馬文庫があります。その他、文教府ギャラリーでは、地域で活躍されている団体・グループの作品展(芸術作品などの展示)を開催しています。



交流スペース

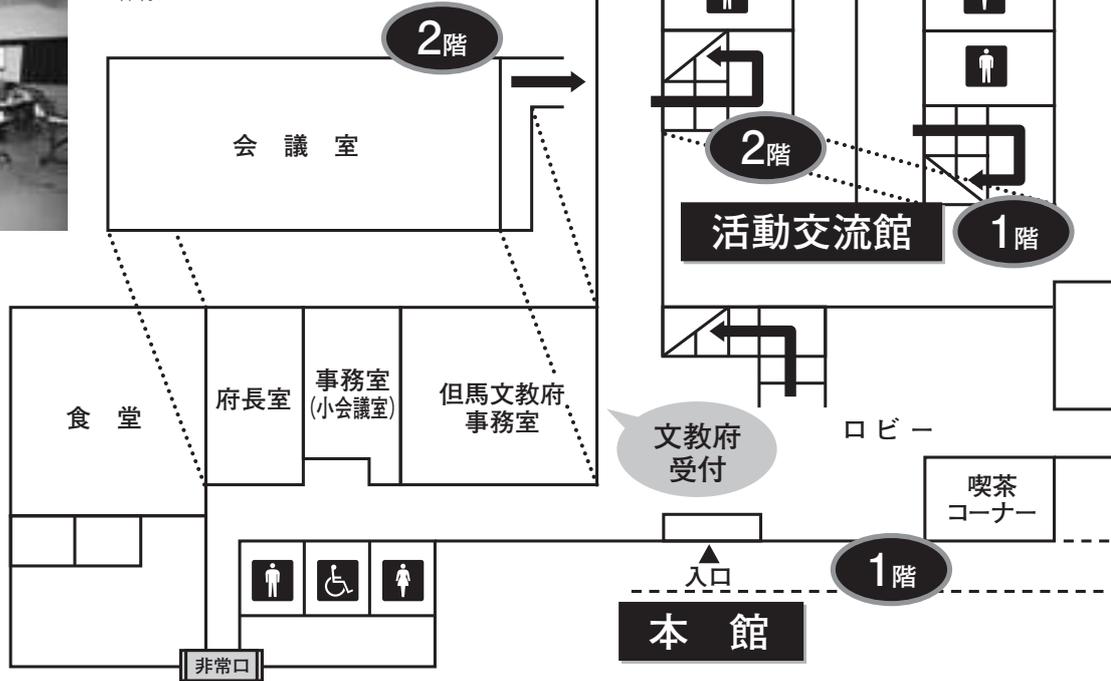
## 但馬文教府 施設配置図



保育ルーム

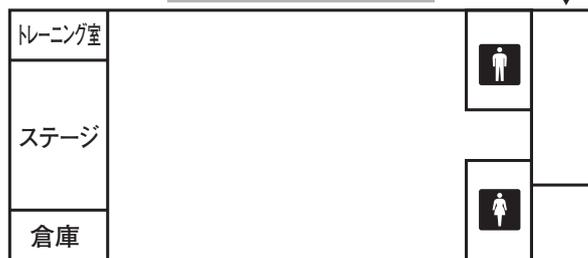


会議室



食堂

## 講堂兼体育室



講堂兼体育室



活動ブース



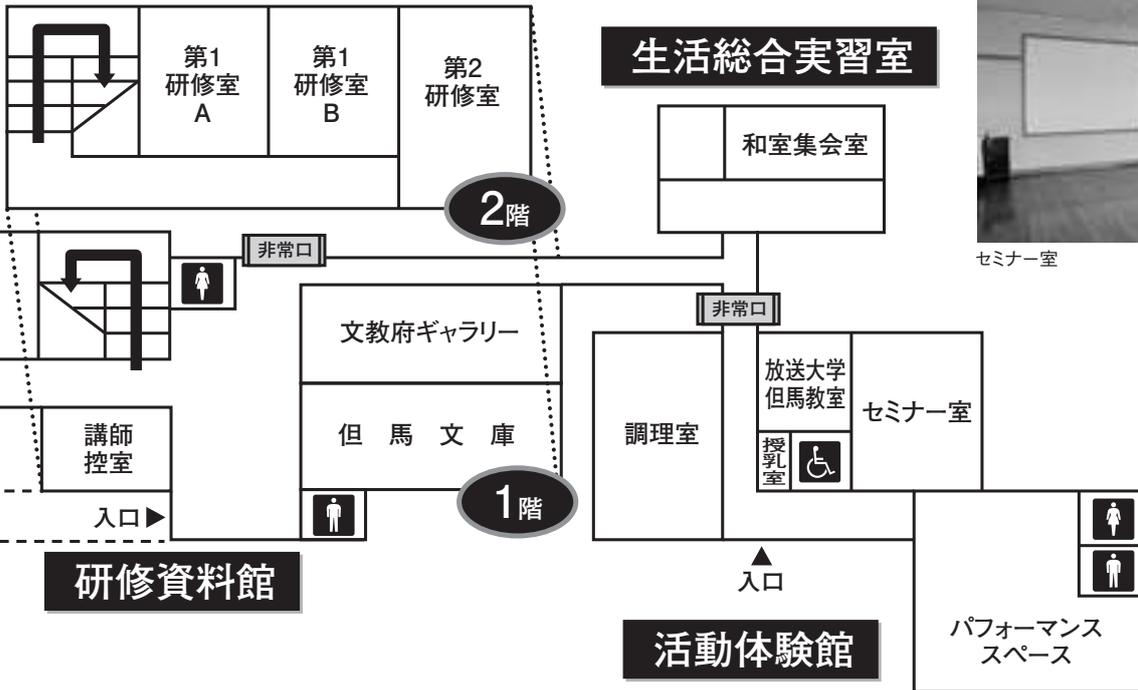
研修室



文教府ギャラリー



但馬文庫



セミナー室



調理室(定員30人)



パフォーマンススペース

## 4年制大学講座「但馬文教府みてやま学園」

但馬文教府みてやま学園は、高齢者が豊かで生きがいのある生活を送るために、健康づくりや長寿社会を担う地域づくり活動の実践力を培うとともに、生きがいづくりや社会参加の推進に寄与することを目的とする四年制の地域高齢者大学です。  
(平成24年度末までの修了生3,348名)



教養講座



専門講座



学外研修



クラブ活動



地域実践活動講座



運動会



学園祭



新春放談・交流会

## 地域活動実践講座「但馬文教府みてやま学園大学院」

但馬文教府みてやま学園大学院は、高齢者大学等での学びをもとに、実践的な社会参加活動について、幅広く実践的に学習することにより、地域づくり活動などに主体的に取り組む意欲を培い、実践力を身につけ、地域づくり活動等の実践者を養成する2年制の地域活動実践講座です。 (平成24年度末までの修了生204名)



基礎講座(パソコンの学習)



実践講座(地域演習講座)



応用講座(グループ別講師招聘講座)



実践講座(実践発表)



出張フォーラム



近畿大学豊岡短期大学との連携講座

### 近畿大学豊岡短期大学学園祭に出演



ステージ発表



模擬店出店

## 但馬生活創造情報プラザ

但馬生活創造情報プラザは、但馬地域で新しいライフスタイルの創造に向け、芸術・文化、環境・資源、健康・福祉、子育て、まちづくりなどに取り組むグループの活動拠点として、また、グループ間交流、生活創造活動や暮らしに関する情報の収集・発信の場として設置しています。

### 但馬ゆうゆう塾



秋の郷土料理教室



Let's パソコン



親子粘土教室



創作折り紙教室

### みてやま交流会



こどもひろば(ミニ運動会)



こどもひろば(クラフト)



ふれあい作品展



グループのつどい

## 但馬文教府の各種事業

但馬文教府では、芸術・文化活動を行っている団体と連携して、活動の場、発表・交流の場を提供することで、生涯学習の充実を図るとともに、芸術・文化の発展と振興を推進しています。また、学校と連携しながら、青少年の健全育成に係る事業を展開しています。



但馬歴史講演会



文教府夏期大学



但馬美術展



ふるさとの心をうたう但馬合唱祭



但馬文学のつどい



「学ぶ高齢者のつどい」但馬ブロック大会



科学する但馬の子ども作品展



小・中学生作文・詩集「但馬の子ども」

## 但馬文教育創立50周年記念事業

8月24日(土)、豊岡市民会館文化ホールで但馬文教育創立50周年記念式典を開催しました。また、記念シンポジウムや特別公開講座、特別企画展、彫像「遙かなる想い」除幕式の実施、50周年記念誌の発行などの事業を展開しました。

### 50周年記念式典



式典の様子



川上教朗府長の式辞



金澤和夫副知事の挨拶



森哲男理事長による知事揮毫額の披露



兵庫県知事からの感謝状を授与される田垣充功氏



オープニングアトラクション(但馬舞踊協会)



記念アトラクション(せきのみや子ども歌舞伎)

### 記念式典に引き続き開催された第46回文教府夏期大学



講演の様子



講師(山田法胤師)



講師(湯川れい子氏)

彫像「遥かなる想い」除幕式



彫像「遥かなる想い」の除幕



(右から3番目が作者の田垣充功氏)

記念シンポジウム



基調講演(講師:兵教大客員教授 廣岡徹氏)



パネルディスカッション(テーマ:「但馬文教府の役割と地域の活性化」)

特別企画展



河村小百合のメッセージキルト展



パッチワークのミニ講習会(講師:河村小百合氏)

特別公開講座



但馬文教府特別公開講座  
(講師:フリーアナウンサー 山本浩之氏)



みてやま学園教養講座<公開講座>  
(講師:兵教大名誉教授 山田卓三氏)

## あ と が き

但馬文教府は、但馬の地域文化の振興と人づくりの拠点として、昭和38年12月に開設しました。

爾来50年、但馬文教府は、関係機関・諸団体等との強固な連携をもとに、芸術・文化・教育の振興をはかり、人々の心にゆるぎない大地としてのふるさとを築きつつ、その使命を果たし続けてきました。50年という半世紀もの長い歩みを「記念誌」に顕彰し、その功績を私たちの心に留めておきたいと思えます。

この記念誌には、美しい但馬を維持し、新しい但馬を築こうとする人々の笑顔あふれる写真があり、理想に燃える但馬人の決意が表現されています。これらを見てもみますと、改めて但馬文教府の歴史と伝統を感じるとともに、但馬文教府が地域や先輩諸賢のご支援やご努力により、地域に根ざした活動の拠点となっていることを再確認することができました。

新しい但馬づくりに必要不可欠となった但馬文教府は、生涯学習や芸術文化活動の発展に貢献するとともに、愛着と誇りが持てる地域づくりのために生活創造活動の支援を行ってまいります。

最後になりましたが、この記念誌の作成に力をお寄せくださいました関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

但馬文教府創立50周年記念事業実行委員長

藤原 俊輔



---

**但馬文教府創立50周年記念誌「三百里揆文教」**

平成26年1月発行

編集・発行 但馬文教府創立50周年記念事業実行委員会  
〒668-0056 兵庫県豊岡市妙楽寺41-1  
TEL.0796-22-4407

印刷所 株北星社

---

